
考える人

末吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
考える人

【Nコード】
N6900X

【作者名】
末吉

【あらすじ】
いつでもどこでも考えてしまう主人公がお送りする、ほぼゆったりの学園ファンタジー。色々ががんばってもらいます。

プロローグ（前書き）

つたない文章ではありますが、どろどろゆるりと。

ブローグ

『人間は考える葦だ』とは、昔の人はよく言ったものだ。確かに、何か問題が起こったときは、その解決に向かつて考えるものだ。まあ、それでも問題が解決するとは限らないけど。

さて、前置きもこれくらいにして、そろそろ自己紹介をしよう。

僕の名前は風間泰輝^{かざまたいき}。年齢は十五。趣味は料理と読書と運動。これはいたって普通。ついでにいうと容姿も普通。でも特技が普通じゃない。

特技は何かについて考えること。

いや、自分でもおかしいと思っではいるんだ。だって、これのせいで授業には集中できないし、授業中に寝ちゃうし、寝ようにも、ふとお題を思いつくと、そのまま考え出して眠れなくなるのもしばしば。これは病院に行っても、病気ではないといわれる始末。

なあ神様、僕が一体何をしたっていうんだよ………？

………愚痴ってごめん。まあ、そのおかげで国語の成績は異常に良いし、発表の時もきちんとまとめられていると先生に褒められたりしたけどね。

とまあ紹介で結構時間食ったけど、そろそろ物語をはじめようか。僕と彼女……月島力リアと出会った高校一年生から。

第一話（前書き）

よろしくお願いします。

第一話

そうあれは、桜が舞い散る4月。僕、かごまたいき風間泰輝は、晴れて朝露高校に入学できます。いや、模試では結構ギリギリな判定だったから、正直うれしんだけどね。

……うん。ごめんなさい。ちょっと調子乗ってしまいました。ハイ。

じゃあまずは、高校の説明をしようか。

僕が通うことになった朝露高校は、僕の家から歩いて、五分ぐらいで着くぐらい近い私立高校なんだ。なんでこの学校にしたかという、家から近いのはもちろん、制服がかっこいいからなんだよね。クラスは、A、Fの六クラスとは別に、特別クラスがあるらしいんだよね。らしいとは、この学校にいった先輩たちに訊いてみたんだ。なんでも、その特別クラスには、僕たちみたいな一般人とは根本的に違うらしいんだよね。違うってなんだろう。考え方とかかな？まあそれで、さらに先輩たちが言うには、そのクラスはこの学校の別館にあるらしいんだって。……らしいって先輩たちも噂で聞いたことがあるくらいでよくわかってなかったんだよね。次に、高校の構造でも説明しようか。さっき言ったように、この学校には、本館と別館があつて、本館は僕たちが勉強する場所で、別館が特別クラスの人たちのためにできた場所らしいんだって。

……うん、学校の説明はこれで終わり！

さて、制服を着て校門の前にいるんだけど……大きいね。うん、建物自体が。中学からこの前通っているけど、いまだに慣れないね。と、突っ立ったままだった僕の背中を、バシーンと誰かが叩いて言った。

「こんなところで突っ立っているんじゃないわよ、泰輝。」

「痛いよ、はかせ波風！」

「突っ立っているのが悪いんじゃない。それと、いい加減苗字で呼

ぶのやめてくれないかしら。理江でいいって言ってるじゃない。」

「ほかの人に、なんか勘違いされるからいやだ。」

「私は別に勘違いされてもいいけど………」

「なんか顔が赤くなつて小声になつたから聞こえづらいな。なんて言つたんだろ？……まあいいか。あ、波風はかせの紹介をしとかなきゃ。

え——名前は波風理江はかせりえ。僕の幼馴染で、くされ縁的な存在。年齢は、今の僕と同じ十五で、結構な美人なんだけど、何故か僕と一緒にいたがる。前に、『なんで僕と一緒にいるの？』的なことを訊いたら、赤くなりながら『いつ、いいじゃない別に！私がどこにしようが私の勝手でしょ！』と言いながら殴られそうになつたけどね。でも、その気になれば彼氏の一人や二人はすぐできるだろうに、なんで僕についてくるんだろ？う……ん、謎だ。ちなみに僕の特技……体質かな？のことは彼女は知らない。だって、言えるわけないじゃない、あんなこと。

と、そんなことをしていたら、

「もう！ほら、突っ立ってないで行くわよ！」

と、僕の右手をつかんでそのまま、ひっぱっていった。

「え！！あの、ちょ、ちよつと！！」

と僕はされるがままに引きずられていた。

どうにか手を放して一緒に体育館にいく途中に、ふと僕は気付いた。体育館の近くの木に、一人の女の子が突っ立っていた。その子は遠くからだつたからよくわからなかったけど、結構可愛い部類に入るんじゃないかな？とか思っていたら波風がこういった。

「遅れるわよ。何やってんのよ。」

それに対して、僕はさっき見ていた方向を指さしながら、

「え、ああ、ちよつとそこに女の子がいたもんだから、どんな子かなあと思つて。」

といった。いつて、しまった。すると、波風が怒った様子で、

「へえ……遅れそうになっているのに、他人、しかも女の子のことを気にするんだあ………」

といってきた。ヤバイ、ヤバイ、うっかり口走ってしまった一言で僕の命が危機に瀕してしまった。

言い忘れていたけど、波風は空手や合気道は有段者で、僕に対してだけなぜか実力行使を行う。うっかり口が滑っただけなのに、全くまあ、そのおかげで体が丈夫になったし、回復速度も速くなったしね。

そんな感じで今回は早く気絶できるかなあ、と思いながら待っていると、波風が僕の指差した方向をみていった。

「・・・そんな子どこにもいないじゃない！全く、早くしましょう。」

「えええ！！嘘！」

と言って僕は、女の子がいたはずの木を見ると、ほんとに誰もいなかった。

「あれえ？おかしいな？」

と考えながら呟くと、

「おかしいな？じゃないわよ。置いてくわよ。」

と前のほうから、波風の声が聞こえた。なので、僕は慌てて

「・・・ああ！！待ってよお！」

といいながら後を追っていった。

しかし、あの子は誰だったんだろ？

「おゝい、月島あ。何してたんだよ？」

「別に・・・それとなれなれしく呼ばないで。矢島。」

「悪かったって。そろそろ別館に行こうぜ。俺たち以外の新生はいるみたいだぜ。」

「・・・分かった。今いく。」

入学式が終わって、それぞれのクラスに僕たちは行った。あ、波^は風と僕は同じAクラスで、これで十年連続なんだよ。「また同じクラスだね。」と言ったら、「そうね。」と短く返された。うんまあ、十年も一緒のクラスだと嫌になっちゃうよね。それで、担任の先生が来て、みんなで自己紹介していったんだ。

僕はあんまり目立たないように、普通に自己紹介をし終えた。波^は風は容姿のせいなのか男子から注目を浴びていた。自己紹介を全員終えた後、先生が明日の予定を言って入学式は終わった。僕は、そのまま荷物をもって一人で帰ろうとしたんだけど、

「おゝい、風間。一緒に帰ろうぜ。」

と言ってきた。えゝゝと確かこの人は、

「木島君、だったよね。」

そう、確かこの人は、木島啓太君^{きしまけいた}だ。容姿はファッションモデルにでもいそうな感じなんだよ。・・・女の子にもてるんだろうなあ、と思ってしまったので、慌てて僕は中断した。それを知ってか知らずか、

「おう、そうだぜ。で、一緒に帰るのか？」

と言ってきた。

「なんで僕となの？」

と訊いたら、

「いやあゝさっきの自己紹介聞いてたら、なんか仲良くできそうな感じがしたから。・・・俺、この町に越してきたばっかだからさ。色々不安なんだよ。」

と答えが返ってきたので僕は、

「案内してほしいの？」

「・・・まあ、ぶっちゃけるとそうだな。」

「オブラートに包む気なんてないでしょ。」

「まあ、そういうなって。これから同じクラスなんだからさ、仲良くしようぜ。風間。」

「仕方ない。町の案内ならやってもいいけど、木島君はお昼どうするの？」

「啓太でいいって。それも含めてお願いするんだよ。」

「図々しいね、啓太は。」

「それが社会で生き残るコツだ。」

「言いながら僕は新しくできた友達と教室を出ただけど、

「さつさと帰るなんて薄情ものね。」

と、いかにも怒り心頭な波風が廊下に立っていた。

「おい、なんだ、この女は？」

と真顔で訊いてくる啓太君。そんなこと言うから、波風がさらに怒った顔しちゃったじゃないか！……仕方ない。波風のことを紹介しとこうか。

「えーと、彼女の名前は波風理江。同じクラスだよ。」

と言ったら、波風が、

「か、彼女って何言ってるのよ！！」

と赤くなりながら言ってきた。……え？なんで？赤くなる要素なんかないでしょ？なんて思っていると啓太が、

「ああ！！趣味が格闘系の体育会系女子か！」

と言ってきたので波風^{はかせ}が、

「殴りたいの？あんた？」

といった。すると啓太が、

「そんなことは置いといて、帰ろうぜ。」

と強引にまとめていった。……君が場をかき乱したんだからね？自覚あるの？と考えてしまったので、僕は慌てて思考を中断して、そのまま帰ろうとする二人の後を追った。

で、学校から喋りながら出る途中に、僕達は別館の話題になった。
 「へへへ、特別クラスねえ。だから別館なんてもんがあるんだ。」
 「でも特別クラスの人たちって見たことない、って先輩たちが言うてただけど。」

「そもそも、別館の中身がどうなってるのかわかってないのよね。」

「え？地元なのにか？」

「見学に来たとき別館については触れなかったでしょ？それに、」

「確かに。それで？」

「特別クラスだけ入試じゃなくて、全国から集めているんじゃないかな？」

『は？』

と僕の推測に二人の声が重なった。・・・あ、この高校のパンフレット見た時におかしいな、って思っちゃって考え出した推測なんだけど・・・これは言わないとまずいかな？

「どういうことだよ。」「どういうことよ。」と迫ってくる二人。

これは・・・言わないとまずいな。

「えへ」と、この学校の入試、憶えてる？確か、AとFの6クラスで全240人だよ。それで特別クラスの入試がないのがおかしいでしょ？」

「確かに。」「そうね。私たちだけ入試があるのはおかしいわね。」

「でしょ？それで考えてみたんだけど、特別クラスと呼ばれるクラスの人たちは、それにふさわしい『何か特別な才能』を有してるんじゃないかって。」

「それは？」

「それは分かんないよ。けど、この町だけでそれが集まるわけがないだろうから、全国からそういう人を集めているんじゃないかって考えたんだ。」

「確かに、そう考えるとつじつまが合うな。」

「そうね。というか、よくそんなこと考えてたわね。」

「あははは……。」

言えない。まさか、入試前日にパンフレット見てからの考えだなんて。そんなこと言ったら波風が、^{はかせ}「あんだ前日に何やってたのよ！」と怒るに決まってる。

……だって気になっちゃって止まらなくなっちゃうんだもん。と、そんな僕的心情を知ってか知らずか啓太が、

「結局、特別な才能ってなんだろうな？」

と言ってきた。その問いに僕たちは答えることができなかった。そして僕は、それについて考え込んでしまった。そのまま歩いていると、

「あれ？」「あんな人達いたっけ？」と二人が立ち止った。考え事をしてた僕はそれに気付かず、ドン、と二人の背中にぶつかった。『いつたあ……』。どうしたの？ふたりとも。」

と訊いてみると、啓太が、

「おい、あんな奴らいたっけか？」

と訊いてきた。どんな人たちなのかと僕も見てみると、そこには、完全に私服な人たちが——おそらく下校中だろうか——歩いていた。彼らは、僕たちに気付く様子もなく、そのままばらばらになって帰って行った。

どのくらいそのままになっていたんだろうか。周りを見ると、みんな動けなかったようで、ボーッと突っ立っていた。そして、

「おい、あれがもしかして特別クラスの連中か？」

と、啓太が訊いてきた。すると波風が、^{はかせ}

「多分、そうなんじゃない？私も初めてみたからわかんないけど。」
といったあとに僕が、

「あれが特別クラスの人たちだよ。」

と断言した。そのことに二人は驚いたみたいだけど、すぐさまこう訊いてきた。

「根拠はあるの(か)?」

「なきや断定してないよ、というツツコミは置いて、」

「うん。」

と答えて、説明した。

「特別な才能は何か、って二人にぶつかる前に考えてみたんだけど、それって、一般のクラスの人たちとは別な考え方や、その人を特別にする才能のことを指してるんじゃないか、って思ったんだよ。」
「なるほど。」
「そうね。」

「でしょ?で、ここからが根拠となる部分なんんだけど。」

「ふむふむ。」

「さっきの人たちの服装、私服だったでしょ?それは特別クラスの人たちに、学園側が色々な条件を付けて入学させた条件の一つなんじゃないかって。」

「おい、ちよつと待て。そのいろいろな条件ってなんだよ?」

「うゝん、簡単に思い浮かべられるのは学費の免除、生活費の補助・・・・そのくらいかな?」

「と言ったんだけど・・・二人ともあ然としているよ?あれ?そんなに僕、おかしいこと言ったかな?」

と、ようやく正気に戻ったのか、啓太が、

「お前・・・。」

「うん?な、何かな?」

「やばい、引かれたかな?」と思っていると、

「すっげゝじゃねえか! たったあれだけで、どうやったらそんなことまで思いつくんだよ!」

と、思いつき感激していた。続いて波風はかせが、

「泰輝って、たまにすごくかつこよく思える時ってあるよね。」

と、いつもとは何か違う口調で言ってきた。・・・褒められているんだよね?これ。

このままでは話が進まないの僕は、

「二人とも、早く帰らないとお昼食べられないよ?」

という、

「そうだったな。もともと案内してもらうつもりだったんだな。結構衝撃的なことが起こり過ぎて、忘れてた。」

「そうよね。でも家に帰ってからにしない？」

「うん。でも、啓太の家はどっちなの？」

「俺はこっちだな。」

と啓太は、僕たちの帰り道と同じ方向を指差した。

「あれ？私たちと同じ方向ね。」

「ん？そうなのか？じゃあ、これから毎日登下校は一緒だな。」

そう啓太が言った。僕としては、登下校に一人増えた方がうれしいんだけどね。

「じゃあ、帰ろうか。」

と言って僕たちは、昼を食べたら校門前に集合と決めながら帰って行った。

1 - 4 探索（前書き）

ここからちょっと趣向を変えてみます。

1 - 4 探索

「は~~~~あ。つまんねえな。結局どこでもいっしょなんじゃないのか？」

「そんなことはないよ。ここは結構面白いと思うよ。」

「・・・私も。」

「まあ、確かにここは、ほかのところとは違いそうだな。」

「先輩たちも、ここは結構楽しいところだって言っていましたけどね。」

「

「それが胡散臭いんだよねあ。俺たちは本館のやつらに干渉できないんだぜ。まるで隔離されてるようじゃないか。」

「そうだけど・・・。」

「でも、それは仕方がないんじゃないかな？」

「そうですね。」

「・・・私はこれで。」

「おう、じゃあな、月島。」

「さようなら。」

「また明日。」

「またね。」

僕は家に帰って、お昼を食べて、着替えて、荷物を持って、学校の校門前に行った。これらを終えるのにかかった時間は、たったの20分。そんなこんなで、僕は二人より早くついてしまったので、待つことにした。20分後、啓太がやってきた。

「早いな、風間。」

「まあね。ところで、お昼は？」

「食っているわけないだろ。だから、おいしいところ教えてもらうぜ。」

「了解。．．．波風^{はかせ}はまだかなあ？」

と僕がつぶやくと、

「ごめん。遅くなっちゃって。」

と波風^{はかせ}が走ってきた。

．．．．．あれ？なんかいつもの服装と違うような．．．？と、

啓太が、

「へえ。結構可愛いじゃないか。いつもこんなのか？」

と僕に訊いてきたので、正直に、

「ううん。いつもは動きやすい恰好なんだけど．．．。」

といった。だって、波風^{はかせ}の恰好が、妙に女の子っぽいんだもん。だって、その、活発な印象を与えるグリーンのワンピースに、ちよつと丈が短いスカートをはいてるんだよ？普段の恰好からは想像もつかないから、妙に色っぽいんだ。なんでいきなりそんな恰好をしたんだろう、と考えて一つの推測を立ててみた。そうこうしてるうちに、波風^{はかせ}が近づいてきたから僕は、その推測をいった。

「ねえ、波風^{はかせ}。どうしてそんな恰好してるの？もしかして．．．。」

「

「な、何かしら？」

「もしかして、啓太に女の子っぽいところ見せたいの？」

「．．．．．このバカア！！！」

「ぐはっ！！！！！」

と僕を思いっきり殴った。．．．．．あれ？違うの？どこが違ったんだろう。と、それに見かねた啓太がこういった。

「さて、全員そろったんだから、さっさと行こうぜ。」

「そうね。．．．ほら！さっさとしなさい！っていうか、泰輝、またそんなに荷物持ってきたの！？」

「え？いつも通りじゃないか。それに、どうせ案内するんだから、

これを持ってつても別に問題ないよ。」

「うお！・・・よく見たら結構な荷物じゃないか。何が入ってるんだ？」

「まあ、案内の途中でわかるわよ。」

「？」

と、疑問符を頭に浮かべた啓太に、僕たちはこの町の案内を始めた。

「全く、なんで気付かないのかしら？」

まずは、啓太がお昼を食べたいといったので、僕達は喫茶店を案内した。

「いらつしゃいませ。って、泰輝かよ。・・・そういえばあれはどうなったんだよ。」

「マスター、あれは持ってきてるけどその前に、啓太がお昼を食べたいんだって。おすすめ作ってよ。」

「啓太って？」

「この町に引っ越してきた人で高校生だよ。」

「どうも。」

「・・・ん？そうすると一人暮らしなのか？」

「いえ。家族と一緒にです。」

「そうかい。まあ、席に座って待ってな。おすすめ三つか？」

「僕はいらないよ。」

「私も。」

「なら、ひとつだな。待ってろ、作ってくる。」

と言つて、マスターは厨房に向かつていった。すると啓太が、
「なあ、あれつてなんだよ？」

と訊いてきたので僕が応えようとしたら、波風^{はかせ}が、

「モデルガンやプラモデルを本物同様のクオリティにしたものよね。」

といった。うん、そうなんだけどね？ひよつとしてまだ怒つてる？

うゝん、どうやって仲直りしよう、と思つていたら啓太が、

「へえゝ、お前手先が器用なんだな。」

と言つてきた。だから僕は、

「それほどでもないよ。」

と答えた。本当にそれほどでもないんだよ。

実際のをみて、それを想像しながら塗装とかしていると、同じようにできるんだよね。最初はびっくりしたけど、今ではこれで小遣い稼ぎしてるようなもんだからね。でもこれ、相当疲れるから、一週間で一体（丁）が限界。

え？よく塗装用のものがあつたねって？それは、お父さんがそういうのが好きだから、一式揃つているんだよね。

さてと、マスターに頼まれたものはつと・・・えゝと、あつたあつた。これだこれ。と、僕が取り出したのを見て啓太が、

「おい、それつて、本物か？」

と思いつきりおびえながら訊いてきたので僕は、

「モデルガンだよ、これは。」

と言いながら啓太に差し出した。啓太は、信じられなさそうにモデルガンを持つて触つたりしていた。そこでマスターが、

「ほれ、これがオススメだ。・・・それは俺のだな。相変わらずいい腕してんなあ。ほれ、お金。」

といつて、啓太にオススメのオムライスを、僕に二千円を渡した。

その光景を見慣れているはずの波風^{はかせ}が、

「二千円つて、金額がおかしいんじゃないかしら？ふつう五百円から八百円ぐらいじゃないの？」

と訊いてきた。僕はこれがおかしいのかどうかなんてわかんないよ。と、困ってしまった僕に、マスターが代わりに答えてくれた。

「おかしくなんかなくて。だってスプレー代や、作業に費やした時間を考慮すりゃ、二千円ぐらい普通だぜ。」

「そういうものなのかしら？」

「そういうものだ。」

と、いまいち納得してない様子の波風^{はかせ}。そこで、啓太が、

「うわー、めちゃくちゃうつめえー！このオムライスすげー！！」

と感激していた。そして、しばらくして啓太が食べ終わって、こういった。

「ごちそうさまでした。……くった食った。ほんとにおいしかったぜ、ありがとよ風間に波風。」

「泰輝でいいよ。……どういたしまして。」

「口に合って何よりだわ。」

「さてと、いくら？」

「六百四十円だ。」

「安っ！！」

と言いつつ啓太はちゃんと払って、僕たちは店を後にした。

1 - 5 遭遇

その後、僕たちは、町にある商店街や、銀行などの場所を教えた。まあ、その間にも、僕は塗装したプラモデルやモデルガンを渡してお金をもらっていた。合計一万一千円もらって、そのお金は全部、銀行に貯金した。・・・うん、順調順調。この調子で頑張って貯金しようと思っていたら、二人が、僕の貯金で何買おうか相談していた。・・・買いたいものがあるなら、自分のお金で買ってよね！

そんな感じで今は三時。商店街から啓太の家に行こうかと話しながら歩いていたら、

「うん？あれは・・・」

「どうしたの？」

「いや、あれ見ろって。」

と言われて僕は、啓太が指をさしている方向を見ると、そこには、不良に絡まれているあの子がいた。

「どうするんだ？」

「ほっとけないからちよつといってくる。荷物は・・・これだけでいいな。あとよろしく!!」

「は！？泰輝、ちよつと待てよ!!」

「ほっときなさい。」

「なんで波風^{はかせ}はほつとくんだよ！？見過ごせないだろ!!友達なんだから!!」

「泰輝は、」

「うん？」

「この町では多分、誰にも負けないから。」

「どういう・・・」

意味だよと言おうとしたら、

『すみませんしたあ——!!』

と不良たちの声が響き渡った。そして僕は、絡まっていた女の子と

一緒に戻ってきた。

「終わったみたいね。」

「うん、まあね。いやゝ楽だった、楽だった。」

「……おい。」

「なに？」

「なにやっただよ？」

「何って……普通に不良たちをモデルガンで脅しただけだよ。」

「あれかよ！！ってか、まだ持ってたのかよ！」

「あれ？太極拳とか、空手とか、ボクシングとか使わなかったのかしら？あと毘は？」

「はあ！？何言っただよ波風！！！」

「手が痛くなるから嫌だし、毘は作るのに結構時間かかるんだよ？もつたないじゃないか。」

「そんな会話をしていたら、」

「……お前、手をどける。」

「え？僕？」

と訊いたら、お前以外にいないだろ的な目をされた。……気付かなかったけど、僕、この子の肩に手を置いていたみたいだ。

「あつ、ごめんね、気付かなくて。」

と言っただ僕は、その子の肩から手を離れた。すると、その子がとても不思議そうな顔をしていた。……何か僕の顔についてる？そんなことをやっていたら波風^{はかせ}が、

「ところで、その子誰？この町にいたっけ？」

と訊いてきた。いや、多分この子は……なんて思っているとその子が、

「私に近寄るな！！！」

と大きな声でしゃべった。すると、

「えええ！！二人とも、どうして離れちゃっの？」

「知るか！！」「知らないわよ！！！」

としゃべりながら、二人は数メートル離れて行った。なにこれ！？
どういうこと！？などと思っていながら僕は、この子の正体に確信
を持った。なるほど、確かにこういう人たちなら、『特別な才能』
と呼べるんじゃないか、と考えていたら、その子が、

「・・・お前、どうして効かないんだ？私の『声』が。まさか・
・いや、そんなはずは・・・」

とぶつぶつ呟いていた。とりあえず、どうしようかこの状況、と考
えようとしたら、啓太が、

「泰輝！その子はいつたい何者なんだ！？」

と大きな声で訊いてきた。波風を見ると、『教えなさいよ！』って
眼で睨まれた。正直怖いよ、その目。仕方がないので、僕は二人に
近寄って推測を言った。・・・その時にあの子がまだ悩んでいる姿
を見た。よほど信じられないことでも起こったのかな？

「一応断っておくけど、これは本人に訊いてないから僕の推測だよ。」

「それでもいいぜ。」

「あの子は、うちの学校の『特別クラス』の一人だよ。そして、入
学式の時に体育館近くの木にいた女の子だよ。」

「後半はともかく、前半は理解したぜ。つまり、俺たちがあいつに
近づけないことが、あいつの『特別な才能』のせいなんだろ？」

「泰輝以外よ。」

「そうだな。なんで泰輝は平気なんだ？」

「そんなの僕に訊かれても・・・」

と話していると、その子が僕たちに近づいて——波風や啓太は離れ
てくことはなかったけど——こういつてきた。

「自由にいいぞ。」

その言葉で、波風や啓太が、何かが解かれたように普通に歩いたり、
準備運動したりしていた。しかし、改めてみると、やっぱりかわい
いな、この子。身長は僕よりひとまわり低くて、顔は何処かのお姫
様のような感じがする。年齢は、多分同じ年だろうな。なんて見て

いたら、

「お前、名前は？」

と僕を見てそう訊いてきた。ほかの二人は驚いたみたいだ。僕も内心は驚いてるよ。だって、特別クラスの人たちは、僕たちみたいな普通の人たちと会話なんてしようとしないからだ。というか、あっちの方が会ってこないような気がするんだけど。なんて思っていたら、

「さっさと答えないか。」

といらだつような声でもう一度言ってきた。なので僕は慌てて、

「か、かごまたいき風間泰輝だよ。」

と答えた。すると、

「風間泰輝、か。私は月島カリアだ。先ほどは助けてもらい、ありがたいと思っている。」

といきなり僕に礼を言ってきた。

1 - 6 月島カリア

意外と普通の子なんだなと思い、「どういたしまして。」と答えた
ら、さらに、

「一つ訊きたいんだが、お前、『外れ者』ではないのか？」

と変なことを訊いてきた。外れ者？なにそれ？啓太と波風^{はかせ}をみてみると、二人とも頭に？を浮かべてる。僕だけじゃないんだ、よかった、よかった。なんて思いながら、

「外れ者？なんのこと？」

と真顔で訊いた。すると月島さんが今度は驚いた様で、

「外れ者を知らないだと？どういうことだ？」

と何やら神妙な顔をして呟いていた。……僕としては、それが君たちの呼称なんだと解釈するけど……いいのかな？なんてことを考えていると、今度は、

「じゃあ、どのようにして、私の『声』の効果を消したのだ？」

と訊いてきた。え、声の効果？そういえばさっき、『近寄るな』と

いったら、波風^{はかせ}や啓太が離れて行ったけど……確かその時は・

・

「なんで、って思ったんだよ。」

「は？」

そう、確かあの時僕は、『なんで離れる必要があるのか？』と考えていたんだ。結局、結論は出なかったけどね。そのことを聞いた月島さんは、間の抜けた返事をしてた。これは、予想外だったのかな？とまあ、しゃべっていたら案の定、波風^{はかせ}たちが話に参加してきた。

「ねえ、さつきから私たち、話についていけないんだけど。」

「そうだぜ。……っていうわけで、泰輝、分かりやすく説明よろしく。」

「えええ！ーいつから僕、そんな役割になったの？」

「そりゃあ、お前、一番初めに言つてた特別クラスについての推測からだよ。」

「やっぱり……。もう、仕方がないなあ。言っとくけど、これも推測なんだからね、合ってると思わないでね!」

「分かってるって。」

「分かってるわよ。」

ホントに分かってるのかなあ、
 と思いながら僕は説明という名の
 推測を話した。

「外れ者、ねえ……。」
「なんだか大変なことに首を突っ込んだ気がするわ。」

僕の推測が終わった後、各々そんなことを言っていた。なんだか今日はずっとこんな感じだなあ、そして、これからこんな感じになりそうだなあ、と思っていると、今までずっと考えていたのか、月島さんが、

「よし。」

とつぶやいたのを、僕は聞いた。何がよしなのかは考えられないので、別にいいかと思っていたら、いきなり月島さんが、僕に向かつて、とんでもないことを言った。

「風間泰輝。私は、お前のことを気に入った。お前のことをもつと知りたから、一緒に住もうではないか。」

「え、ええええええ！！！！！！！！！！！！？！？？？」
と三人の驚く声が響いた。え！？なに！？なんなのこれ！？ちよつ、ちよつと待つて！？いきなり話が飛んだよ！？・・・・・・落ち着け、落ちて着け。冷静になれ。こんな時に限ってフリーズするな、僕の頭！！なんてやっていたら、驚きから解放されたのか、波風がはかせ怒った顔で、

『』

「ちよつ！！何言つてんのよあんだ！！そんなこと、無理に決まってるじゃない！！」

「無理なわけないだろう。私の『声』を使えば。」

「そんなことしたって、泰輝が嫌がるじゃない!!」

「ふむ。確かにそうだが。」

と悩む二人。そこで、何の事だか分かってなさそうな顔の月島さんが訊いてきた。

「風間。何を話しているんだ？」

うーん、結局、僕が説明しなきゃいけないのか、と己の不憫さを呪いながら、月島さんに今まで（不良に絡まれている月島さんを助ける前まで）のことを説明した。説明終了後、月島さんが、

「そうか。なら、また明日だ。」

と言って帰って行った。あ、本当に帰っちゃったよ。その光景を見ていた二人は、

「行っちゃったな。」

「本当にむかつくやつだったわ。」

「珍しいね、波風はかせがそんなこと言うなんて。」

「そりゃあ、あんなこと言われたらさすがにねー！」

「それは忘れて、俺んちだよな。案内するぜ。」

「ありがとう。」

「俺が教えないと駄目だろ。」

「そりゃそうね。」

と言って、僕たちは啓太の案内のもと、啓太の家に行って、ゲームなどで遊んで、一日が終わった。いやあ、これから大変そうだな。風間泰輝かざまたいき、か。ホントに不思議な奴だな。なぜあいつのこと考えると、こんなに楽しいんだろう？　そして、波風はかせという女を見ていると心がざわつくのだろう？　……また明日、だな。」

1 - 7 外れ者の秘密 そして逃走

そして、次の日。僕たち三人は、学校の校門前で、先生たちにかまった。つてわけで一校時目は職員室に連……。行されるはずが、何故か校長室に案内された。う……。昨日のことについて訊かれるんだろうなあ、と薄々思っていたけど、まさか校長室とは。そんなわけで今、校長と対峙しています。では、早速きいてみますか。

「校長先生、僕たちに何の用ですか？」

「そうだけ。なんで俺たちがここにいなきゃなんねえんだよ。」

「そうです。理由を教えてください。」

「ふむ、理由か……。それはだな、月島カリアとお前たちが、昨日接触したからだ。」

「やつぱりね。僕も連れられながら考えていたから、大体予想はついていたんだよね。でも他の二人は、驚いたようだった。」

「ちよつと、それだけでどうして私達がここにいなきゃならないんですか！？」

「ほんとだぜ！！どうしてだ！？」

と二人は詰め寄っていた。でも校長は、それを意にも介さずに淡々と話した。

「月島カリアは『外れ者』だ。だから――」

「だから、僕達みたいな普通の人たちと極力会わせないようにしている、と。そういうわけですか、校長先生。」

『！？』と校長室にいた全員が驚いた。

「な、なぜ……。」

「ついでに言いますと、そう定めている理由は恐らく、彼らの『特別な才能』が、僕たちに対して発動することで、僕たち自身に何かが起こる可能性があるから、違いますか？」

……。いえ。全員呆然としているよ、つてこと

は、凶星なんだねえ。うん、みんな驚いてところ悪いんだけどさ、僕が一番びっくりしているんだよ？

「……まあ、昨日の夜、寝る前に考えてみたんだよ？それが一応ここまでなんだけど連行されている間にも考えることができたからさらに詳しく言おうかな、と思ったりしたけど、ここは、

「校長先生、詳しく説明お願いします。」

と校長先生にバトンを渡した。バトンを渡された校長先生は、

「っ！……あ、ああ。分かった。説明しよう。」

と言って語りだした。

「はじめに、このことはほかの一般の生徒には秘密にしておいてくれ。元々この学園は、君たちみたいな一般の生徒を取っていたわけではなく、カリア君たちみたいな人たちのための学校だったんだ。外れ者、と我々が呼んでいる子供たちのためのな。」

そのことに僕たち三人は驚いた。まさか、僕たち（啓太を除く）の家の近くの学校にそんな秘密があったなんて。そして、校長先生がさらに、

「ここでは主に、その子供たちに『力』の制御を教えることをしていた。」

「『力』って、あの……」

「そうだ。カリア君みたいな『声』もその一つだ。あの子は、声で人を思いのままにできる。君たちも、実際に目の当たりとしたたろ？」

と言われて僕たちは、あの時を思い出した。そういえば『声』がどうとか言ってたけど、そういう意味だったんだ。でも、

「確かに、実際に受けましたけど、三人とも何事もありませんでしたよ？」

実際は、僕以外が近寄れなかったんだけどね。ほかの二人も、近寄れなかったことを影響だと思っていないのか、

「ああ。」

「そうね。」

と返していた。しかし、

「いや、カリア君のは『来るな』といわれると、彼女に近寄れなくなるんだ。どんなに近くてもね。」

と校長先生が言った一言で、二人は、合点がいったという顔をした。そのことに校長先生は頷きながらも続けた。

「だが、6年前からその子供たちが減って来てしまつて、このままではつぶれてしまうと思い、一般の人たちを取ることにしたんだ。クラスをどうするかは今の通り、特別クラスと一般のクラスに分けたわけだ。これで説明は終わりだ。分かってくれたかな？」

「校長先生、あなたたちはいったい何者なんですか？」

「ああ、私達も外れ者だ。だから私たちはこの学園を作った。・・・といつても、作った人たちはだいぶ前に亡くなつていて、私達で3代目だ。」

「そうですね。説明ありがとうございました。僕たちはこのことを一切、ほかの人たちに話す気はありません。が、呼んだつてことは僕たちに何か罰則みたいなものがあるんですか？」

その僕の一言で、啓太と波風^{はかせ}は顔を強張らせたが、校長先生は、

「いや、君たちにはそのまま暮らしてもらいたい。多少大変なことがあるかもしれないがね。」

「校長先生、それはなんでも軽すぎませんか!？」

といったのは体育の先生だった。というか、普通のクラスで教えている先生たちにいたのか、外れ者の人たち。

「どうしてだね？」

「どうしてつて、この学園の秘密を話した上に、そのまま普通に暮らせて今までの対応と違うじゃないですか!？」

え?今までもこういうことあったの?

「しかし、君に訊きたいが、この三人、特に先程私が説明しようとしたときに、すべてを話したその少年をどうするつもりだ?しかも、カリア君が今日登校してきたときに言っていたそうだが、風間^{かざま}泰輝^{たいき}という少年は彼女のお気に入りみたいだぞ?もし、この中にそ

の少年がいたなら、君はどうするつもりだ？」

え？僕のことだよな？多分それ。校長先生、面倒だらうけどさ、一般の人達の名前ぐらいおぼえようよ？

「……あ。『お気に入り』の部分で波風がちょっとカチンときた
みたいた。それに気づかず、

「それは………。ですが！この少年は危険です！」

「危険？なんでかね？」

「この少年は私たちが連れて行こうとしたら、ほかの二人とは違い、冷静な状態にここまで来たんです！まるで分かってたかのように！」

「……まあ確かにね、予想はしていたよ？だって、先輩たちに訊いたのを参考にして、なぜ特別クラスの人たちと会ったって情報がないのか、と考えていた時があったから。それをさらに参考にして、昨日の出来事から今日起こるであろうことを考えていたから。そのおかげで、寝たのは三時だけだね。あと僕のこと、『少年』じゃなくて『生徒』にしてくれないかな？仮にもこの学園の生徒だ」

よ？そんなことを思いながら、話を聞いていると、また別の先生——今度は社会の先生が——話に加わった。

「校長先生。」

「なんだ？」

「この教室の扉の前に誰かいます。」

「なんだと！？まあ、とりあえずそいつを捕まえて来い。」

「分かりました。」

「**だって今度は数学の先生が、扉を開けて走り出した。**」

正直に言うね。この光景はすごいね。でも、なぜだか驚くより『なぜか』って考えてしまふんだよね。ほかの二人は、

「まさかあの先生まで……。」 「この学校に入学してよかったぜ。」

と、
 波風はともかく、
 啓太？君の感性ちよつとおかし

いんじゃない？

「……人のことは言えないけどさ。とかやっていたら、数学の先生が、

「連れてきました。」

と言つて連れてきた人を見て校長先生が、

「矢島君！？どうして君がここにいるんだね！？授業中だろ！？」

と驚いていた。それを平然とその人——矢島君が——こういった。

「なんでって、月島が風間泰輝かさまたいきってやつのことをしゃべってたから、

どんな奴なのかなって、見に来ただけさ。」

「全く、君というやつは。……まあ、我々としてもその、風間泰輝かさまたいきという少年に対しては興味があるからいいんだが、君には判

のか？」

「……あつれえ？なんか話がおかしな方向に向かっているなあ。どうしようかなあ。そういえば、今持っているのは確か……

……と持ち物の確認をしながら話を聞いていたら、

「わかるさ。特徴は月島に訊いたからな。」

「ほう。ならばこの中から見つけられるのか？」

「ああ。」

「ならば見つけてみる。」

「いわれなくても。俺の月島を奪ったやつはただじゃおかねえ……」

「

やばいやばいやばい。どうしようどうしよう！？なんか見つかったらヤバイ気がする！……これは完全に勘だけど、なんかそんな気がする！！けど、どうやろうかと考え込んでいる僕を尻目に、矢島君が僕を探そうとした。……本来なら、こんなことに使いたくなんてなかったけど、仕方ない。と腹をくくって僕は波風はかせに小さく耳打ちした。その波風は「え！？それをやったら泰輝は……！」とか言つてたけど、気にしない！！そして、矢島君が僕を見つけたという感じの笑みをした。ここだ！！と思ひ僕は、

「あ！あそこに誰かいます！！」

『……!?!』と僕が指差した方向に波風以外の全員は目を向けた。
しかし、そこには誰もいない。すぐさま僕は、手にしていた常備の
煙幕を床に叩きつけた。

「……!?!な、なんだ、これ……!?!?くそ、前が見えない……!?!」

と言ってる先生たちを通り抜けて僕は、校長室を出た。そのままの
勢いで、走り出した。

1 - 8 風間大輝

煙幕が消えて視界が元に戻ったとき、そこには、

「あの少年が居ないだろ!？」

そう、風間泰輝はいなくなっており、あとの二人は残っていた。

「くそ、どこにいったあいつ!?!？」「探せ!!まだ近くにいますだ!!！」

「連絡だ!!一人の生徒が今もこの学校内で逃げている!!探し出せ!!！」

「あのヤロオ。絶対に捕まえてやる!!！」

教師たちは泰輝を捕まえようとし、矢島は自身の怒りで泰輝を捕まえようとしていた。そんな中波風と啓太は、

「…………おい!!なんであいつ逃げたんだよ!!なんでだよ!!」

「…………私たちのためよ。」

「え!どういふことだよ?」

「訳なら後で話すわ。今はとりあえず…………。あ、あの!校長先生!」

「なんだ!?!」

「私たちは戻っていいでしょうか?」

「構わん。さっきのことをしゃべらなければな。」

「ありがとうございます。行こう。」

「お、応。」

「失礼しました。」「失礼しました。」と言って二人とも校長室から出て行った。

ところかわって、僕は今、本館を絶賛逃走中。これは今までに何回もやっているからある程度先生の対応は分かっているんだけど、それがこの学校に当てはまるのかは分からないだよ。……さて、まずはあそこから行こう。その対応次第で、今後の方針を変えるか。そして僕はその場所に向かって走りながら、これからの方針をシミュレートした。

「くそ！どこに居やがる、あいつ！！なんで見つからねえ！！」
他の暇な先生も搜索に加わっているのに、なかなかあの少年が見つからない。そのことに苛立ちを感じる外れ者の教師たち。彼らは風間泰輝という少年についてもっと知っておくべきであった。一般の生徒だと侮り、名前やその人の経歴などを入学させる前にきちんと見るべきだったのだ。それを、このことで思い知らされる。

ピンポンパンポーン！！

「！！！！！！！！」

教師たちは、放送が鳴ったことに驚いた。そして更に驚くことになる。

「あ、あー、えー、どうも、でいいのかな？僕は今ここにいますから、捕まえないならさっさと来てください。え？ここがどこかわからない？えーと、ここは放送室です。僕を捕まえない皆様、ふるってきてください。」

「！？あいつ、そんなところに居やがったのか！？」

「絶対対え捕まえて、ぼこぼこにしてやる！！」

と言ってみんなが放送室に向かった。しかし、そこには……
、

「繰り返します。あ、あー、えー、どうも、でいいのかな？僕は・・・・・」

と、レコーダーに録音されてた声が流されていただけだった。

「・・・・・っ！！あの野郎！！こけにしゃがつて！！！！」

「くそ！！大至急、他の先生をほかのところに！！学校の出入り口を全部封鎖しろ！！理由なら、不審者が侵入したことにすれば問題無い！！はやくだ！！！！」

と指示を出している校長先生。それとは別に、

「おい、校長。『力』、使っていいか？あいつに、どんな奴を敵に回したのか、思い知らせてやる。」

「しかし・・・・・分かった。許可しよう。ただし、あの少年だけに対象を絞れ。いいな。」

「ふん。いわれなくても。」

と言って、矢島は放送室を出て行った。それを見送った校長に、一人の先生が言った。

「校長先生。」

「なんだ。」

「あの少年の身元がわかりました。」

と言って、一枚の書類を差し出し、それを見た校長は驚愕した。

「こ、これはほんとの事なのかね？」

「はい。おそらくは・・・・・」

「だとしたら、まずいことになるかもしれん・・・・・」

ところかわって、1―A教室では。

「おい！！どうして外に出れないんだよ！？」「そうよ！どうしてなの！？」

「侵入者は本当に居るのかよ!？」と他のクラスと同様に騒がしかった。静かなのは、

「なあ、波風^{はかせ}。さつき言ってた訳ってやつを教えてくれないか？」

「そうね。いいわよ。」

啓太と波風^{はかせ}の二人だけだった。

「あいつが逃げたのは、自身に注目を集めさせるためと、私たちにこれ以上何かが起きないように、私たちの存在感を薄れさせるためそれと、」

「それと？」

「この学校の警備体制やシステムを視ようとしているんじゃないかしら。」

「は? いやいやいや。前半はそうだとしても、後半のは嘘だろ?」

「あら、これらは全部本当よ。だって、中学の時にもこういうことをやっていたから。」

「………まじで?」

「ええ。といつても、最後の理由は中三の頃にできた気がするわ。」

「………あいつは何をやってるんだよ………」

「でも、そのおかげでうちの中学校の警備システムがだいぶん変わったわよ。それに、その警備システムのおかげで、うちの中学周辺から不審者の情報が一切なくて、警察の方たちに驚かれたわ。」

「そ、そうなのか………」

と話していると、一人の生徒が教室の窓を見て、こう叫んだ。

「おい、見ろよ! 校門の近くに誰がいるぞ!」

「なんだって!?」「それホントかよ!?」「もしかして、不審者?」などと憶測が飛び交う中、

「泰輝ったら、もう校門の近くに出てるの?………」
「だとしたら先生たちには悪いけど、勝ち目がなくなっただわ。」

「? どうしてだ?」

「昨日、私が不良を退治した後の泰輝に言ったことを、忘れたのかしら?」

「え？えつとお．．．．あ！そうだ！確か『太極拳とか、空手とか、ボクシングとか使わなかったのかしら？あと毘は？』だったな。」

「そうよ。泰輝の自宅には両親や自分で作った毘や、商店街の人たちから頼まれたモデルガンなどが置いてあるのよ。」

「．．．．泰輝の両親のご職業は？」

「泰輝に訊いたら、『科学者であり、発明家』って返ってきたわ。たまにふらつと帰ってくるときがあるらしいんだけど．．．．．私は見たことはないわ。」

「なんか、あいつの両親もすごいな．．．．じゃなくて！それがどんな関係してんだよ！」

「あら、わからないの？泰輝が自宅に戻ったことは、毘などを取りにいったってことよ。ということは、これで終わらせるみたいね。」

「どうするつもりだ？」

「ある程度逃げて、頃合がよくなったら大人しく捕まる、ってところかしら。」

「あいつ、退学になるってこと、理解してんのかよ？」

「そこは理解しているでしょ。というか、それを念頭に置いてやってるわよ、多分。」

「まさか．．．．．」

「そう、そのまさか。泰輝は逃げようと決めた時から、こうなるとを考えていたのよ。」

「なんてやつだ．．．．．」

1 - 10 教師&生徒VS生徒

「・・・何やら新館のほうが騒がしいな。なにかあったのか？」
「ほんとだねえ。」

「あれ？そういえば、矢島さんはどこに居るんでしょうか？」
「知らん。だが、心当たりくらいならあるぞ。」

「どこに居るんですか？」

「月島が、やたらと昨日会った一般人の話をしていただろ？」
「そういえば。」

「あ、なるほど。そういうわけね。」
「わかったか。」

「え？どういうわけですか？」

「あまりに月島ちゃんがその人の世話すから、矢島君が嫉妬して、その人がどんな人だか新館のほうへ見に行ったんじゃないかな。」

「・・・それでこんな騒ぎが？」

「いや。これは矢島のせいでは無いだろう。」

「・・・では、他の人が起こした騒ぎとでも？」

「ああ。おそらくはな。」

「ねえ！みんな！みてみて！！校庭に人がいるよ！」

「え？」「本当か？」「・・・。」

と四人が見たのは、この学校の制服を着た生徒だった。

「もしかして、サボリかな？」「ええ！？入学して次の日ですよ！」

？」「・・・馬鹿か？お前。」

「私には、誰かに追われているように見えるんだが。」

「そうなんですか？」

「それじゃあ、わたしにまかせて！いつくよおー！・・・・・・
つて、あれ？」

「どうかしたんですか？」

「おっかしいなあ。あの人を見たはずなんだけど、ぜんぜん視

えなかったよ。」

「え？それって……」

「私たち以外にも外れ者がいて、さっきのやつが外れ者、ということになるぞ。」

「……いや、違う。多分、風間だ。」

「風間って、月島ちゃんのお気に入り？」

「ちゃんはよせ。……まあ、そうだな。」

「ふむ。そうすると、彼も外れ者に入るのではないのか？」

「いや。風間には我々みたいな『感じ』がなかった。」

「でも、そうするとおかしいことになりますね？外れ者同士だと効かないって法則が。」

「そんなことを詮索しても意味がないだろう。ひとまずは放っておこう。」

「でも矢島さんが……」

「どうせすぐ戻ってくるだろ。」

そんな会話をしていたら、月島が教室から出ようとしていた。

「……月島ちゃん、どこに行くの？」

「え！？あ、いや、べ、別に！？」

「もしかして、彼のと」

「そこらへんにしておけ。月島が赤くなっている。」

「はいはい。」

「くそ！！今度は校庭だと！？いつの間に外に出ていやがった！？」
「おい！システムが機能しないぞ！どうなっている！？」
『それが・・・、いつの間にか、この警備システムが乗っ取られたみたいで・・・。。』
「なんだと！！？それで、いつ回復するんだ！？」
『あと四十分ぐらいかかります。結構高度なウイルスデータのようなので、それくらいかかるかと。』
「あいつめ・・・捕まえたら絶対に退学させてやる！」

「やられたな・・・。。」
「ええ。」

と言いながら、校長と教頭はシステム制御室にいた。

「まさか、ウイルスまで出してくるとはな。」

「どうするんですか？彼の処遇は。普通に退学ものですよ？」

「彼もそれをわかって、やっているんだろうな・・・。」

「え？どういことですか？」

「彼に関する書類を見てみたんだ。」

「それがなにか？」

「・・・彼は、中学の時に似たようなことを起こしていた。万引きの真犯人を見つけ出したり、殺人犯の逮捕に貢献したり、先生のわいせつ行為を明らかにしたり、などをな。その度に彼は、停学処分を受けている。」

「え？そんなことをしているのに、なぜ停学処分なんですか？」

「そこは今、彼がいた中学に問い合わせている。」

「では今回も・・・。。」

「いや、今回はおそらくそれらとは違っただろう。」

「というところ？」

「今回は標的を自分だけにしておき、きいた他の二人に危害を加えさせないため。それと、」

「それと？」

「……次回以降、この騒動を引き起こした場合に、我々がどのように対応をするのかをみたかったのだろう、と私は思う。」

「そんなことのために、自分から退学処分を受けるようなことを？」

「そんなこと、といっても、生徒の安全の確保は近年騒がれているだろう？この学校は本当に安全なのか、なんてことは多分、誰もが気にしているのではないのかね？それを彼が行動で示しているのだと、私は思う。」

「はあ。それでは、彼の処遇は？」

「これを片付けてから決めるか。」

「つまり、何も考えていないんですね……。」

その言葉を聞いた校長は、今回の騒動で浮き彫りになった弱点を、ひとつひとつ頭に思い浮かべながら、かさまたいき風間泰輝の処遇をどうするか考えていた。

「チィ、あいつめ！いつの間にか外に逃げたんだ！？」

と、二階の廊下を搜索していた矢島は、窓越しに、校門を出ようとする風間を見つけた。それを追いかけてようと窓を開けようとするが、

「くそっ！あかない！！！」

そう。扉や窓は、システムが乗っ取られたために封鎖されたままであった。そこで矢島は『力』を使ったが、

「やっぱり効かないか……！」

そう。この新館は、建物自体に対しての『力』を無力化するシステ

ムが作動していた。

と、そこで彼の携帯が鳴った。

「校長か。何の用だ？」

「これはほかの先生方にも通じているから、言葉の使い方には気を付ける。」

「へいへい。それで？」

「今私たちが追っている少年のことだが、」

「それが？」

「……いや。彼を捕まえたいのなら、あなどるな。以上だ。」

「あ？どういうことだよ？」

「いや。それは身をもって体験してもらいたい。以上だ。」

と言つて、電話は切れた。その数秒後、

「またあんたか、今度はなんだ？」

「君に伝えたいことがあったのを忘れてた。私たちが今追っているのが、かざまたいき風間泰輝だ。そのことを留意してくれれば幸いだ。では。」

そのことに矢島は、

「そうか、そうかそうか。はは、ははは……。ありがたいぜ、校長。」

と言った後、バリン！！という音がした。それは、矢島が窓ガラスを割った音だった。それから彼は窓に足をかけながら、

「覚悟はいいか？かざまたいき風間泰輝！」

と叫んで、窓から飛び降りた。

さてさて久し振りの出番だね。ただいま僕は学校を飛び出して、自宅にいます。ただいまなんて言ってられない！！なんて感じで僕は庭の隅にあるドアを開けて、その中に入って行つた。さて、うちの地下室にやってきました。すごいよね、これ。全部うちの両親が作つたんだよ。

……まあ、それを僕が改造したり、入り口増やしたり、監視カメラの映像をここでみられるようにしたりしたんだけどね。そのことを両親に言ったら、さすが我が息子！！と、喜ばれたんだよ。

さて、そろそろここに来た本当の目的を果たそうか。えーと、まずはどこで捕まるかだけど、学校の裏側にある山にしようつと。それで使用する罠だけど、捕獲用のネットと、電気が流れるワイヤーとあとは……普通のワイヤーだけでいいかな？それと装備だけど……改造したモデルガンに実弾（麻痺弾と麻酔弾）は必須だし、爆弾（威力はそんなに無いからね）も必要、スタンガンは必要かな？といういる準備していると、モニターに誰かが映つた。

「うん？あれ、確か矢島君だね。もしかして僕のこと追ってきたのかな？」

そこに映っていたのは、確かに矢島君だった。ここまで来たとする
と、僕のことはずでにばれていると考えてもいいだろうね。うーん、家が壊れるのはヤバイから、ちょっと細工をしよつと。そして僕は、地下室にあるコンピュータにある言葉を打ち込んだ。

校長が教えてくれた情報をもとに、矢島は泰輝の家の近くまで来ていた。

「ここの近くのはずなんだが……お、ここだな。」

と、泰輝の家の前に立ち止まった矢島だが、

「おい。本当にここでもいいのかよ？」

と言った、言わざるを得なかった。なぜならその先に見たのは、

「空き地になつてゐるんじゃないか!!」

そう、その先には家の形などはなく、空き地となっていた。しかしそれは、泰輝が行ったカモフラージュだった。泰輝があのに打った言葉は、『カモフラージュ：空き地』であった。それによって、庭に埋め込まれた映写機が、空き地を映し出していた。しかもその映像が非常にリアルで、誰も映像だとは気付かない。それに矢島が騙されても、誰も責めはできないだろう。

「くそ!!どうなってやがる!!」

と言っていると、携帯が鳴った。

「おい校長、どうなっている!?!どうして空き地になっているんだ!?!」

『それは本当の事か?……それより、彼が動いたぞ。』

「本当か!?!あいつはどこにいる!?!」

『それは……』

えゝ地下室に在った、学園の裏山へと続く道を通って、ただいま着きました。相も変わらずのどかだねえ。さてと、色々と準備して

から学校の監視カメラに近づきますか。そう考えて僕は、罠の設置をしていった。数十分後、罠の設置を終えた僕は、裏山の近くに設置されている監視カメラに近づいた。

・・・さて、これで準備は万端だな。あとは僕が捕まるまでに、すべてを終わらせることができないといけない。目的を再確認をした僕は、そのまま山の奥に戻って行った。

『目標、裏山にて発見！そのまま裏山の奥に行く模様！』

「奴め、逃げられないと踏んで山に逃げたな！追うぞ！！」

「しかし、どうにも気になることがあるんだが。」

「それは？」

「なぜ今まで逃げてこれたやつが、監視カメラに引っかかるんだ？あと校長が『あなどるな』といていたが、どうしてだ？」

「そういえば・・・」

「そんなことはどうでもいい！！いくぞ！」

「仕方がない。行くか。」

「そうだな。」

「いよいよ終わりますね、これ。」

「これはどう考えても我々の負けだな。」

「え？」

「私達は風間泰輝^{かざまたいき}という少年のことを、あまりにも知らな過ぎた。その結果がこれだ。」

「・・・・・・・・・・ですが、」

「それに、この映像はわざと映っているようにしか思えん。まるで、準備がすべて終わった後のように。」

「!?!」

「となると……彼の処遇をどうするか、我々だけで考えるとするか。」

「裏山に居やがったのか、あの野郎……そうと決まればこつちのもんだ!?!」

「と言って彼は、『力』を使った。そしたら、彼の姿は見えなくなつた。」

その頃、裏山に着いた教師たちかというと、

「くそ!?! 罨か!?! ……なんだこれ!?! 切れないぞ!?!」

「くつ!?! ワイヤーが絡まってほどけない!?!」

ビリリリリリリリリ!?! ……!?! ……!?!

『ぎゃああああああああ!?! ……!?!』

「ふん、バレバレだな。こんなものに引っかかると思っているのか!?!」

「あ!?! またいじゃだめです!?!」

ズボツツ!?! ……!?!

「うわあああああ!?! ……!?!」

「落とし穴があつたんですけど……」

「くそ!?! ……これもあいつの仕業か!?!」

ボカ———ン!!!!!!!!!!

「今度はなんだ!？」

と辺りを見渡すと、

「閉じ込められただと!!」

泰輝が仕掛けた罠に引つかかっていた。

教師たちの周りの木に設置されていた爆弾が爆発し、それによって、倒れた木々が重なり道を完全に封鎖してしまった。

「……………恐るべきは、泰輝のモはや預言と言っても過言ではない『今度はこう動くだろう』という推測であろう。彼は、裏山で罠を設置する際、『ここにこれを仕掛けると教師たちはこう動くだろう』と考え、さらに、動くだろうと予測した場所に罠を仕掛けている。実際に、教師たちは泰輝が予測したとおりに動き、予想通りの結果になってしまった。」

「これで教師たちは動けなくなった、つと。さて残るは……………」

「なんてことを言っていると、いきなり僕の前に人が現れた。」

「やっと見つけたぜ!!^{かざまたいき}風間泰輝!!!!手間かけさせやがって!

!」

「予想に反してはやいね、矢島君。それにしても、よく僕の居場所がわかったね。」

「うるせえ!!裏山に着いてそのまま進んでみたら、先生たちが動けなくなっていてよ。お前の居場所を訊いたら、山頂にいるって話だったからな、迷いなくこれたんだ。」

そう、今僕と矢島君は裏山の山頂にいる。僕がここを選んだ理由としては、空がよく見えるのと、捕まるならどこかの上って、よくない?ってのと、そのぐらいかな。

「・・・おまえ、」

「?なに?」

「どうしてあの時に逃げたんだ!!こんなに騒ぎを大きくしやがって!!」

「君が収拾をつけるわけじゃないでしょ?それに君も原因になっ
ているんだよ?」

「なに?」

「君があの際に校長室に来なければ、こんなことにはならなかった
のに・・・」

「くっ!だが!それで逃げる理由にはならないはずだ!!」

「君の異常な殺気のせいで、ぼくは逃げざるを得なかったんだよ。
さらに、騒ぎを大きくして他の二人が危害を受けないようにしなき
やならなくなったのも、君の殺気のせいだ。」

「!!」

「・・・こうしていると、僕が悪役みたいに感じるから不思議
だなあ。実際はあっちの方が悪役なんだけどね。ふう、僕として
はもうこれ以上やる必要ないから、先生たちのところに行って捕ま
って、処分を大人しく受けたいんだけど。矢島君がそれを許してく
れるかな?と黙っていた矢島君がいきなり、

「でもそれは、元を正せばお前が、月島に気に入られたのが原因じ
やねえか!!」

「いや!それは完ッ全に君の逆恨みでしょ!?」

「なんだと!」

と、我を忘れて思いつきリツツコミを入れていた。

やってもうた!!!でも仕方ないじゃん!!!完全に私怨を持ち込ん
できたからね!この人は!!!というかそれを言うなら、

「そんなに好きだったんなら、告白すればよかったじゃん!!」

「バツ!そ、それができたら苦労するか!!!」

そうだろうね。本当に好きな人にいざ告白するぞ、ってなるとすこ
い緊張したりするもんね。とか感心していると、

「テメエだけはゆるさねえ!!」

とか言つて矢島君が僕に一瞬で近づいた。うわ~~~~びっくりした！
！っていうか、はやっ！もしかしてこれが君の『力』なのかい？な
どと考えていたら、

「オラア!!」

と言つて僕の顔を殴ろうとした。・・・あれ？さっきと比べると
とやたら普通だな？どうしたんだ？なんて考えながら避けていると
「マジでお前に対して『力』が発動しないな。しかし、お前からは
外れ者特有の『感じ』が感じられないな。どういうことだ？」

と矢島君も不思議がつていた。そんなの、僕が知りたいね。気を取
り直してまた矢島君が殴りに来たんだけど、みた感じ素人だなとわ
かったので、僕はカウンターとしてボディブローを割と本気で打ち
込んだ。

「ぐっ!!」

ドサリ、と矢島君が崩れ落ちた。うまくいつてよかった。これで気
絶しなかったら麻酔弾を撃つつもりでいたからね。ふう、矢島君を
背負つて先生たちのところに行くか。僕が起こした今回の騒動に対
する処分は、こういうものかな？なんて考えながら僕は、山頂を後
にした。何とか片付いてよかった、よかった。

1 - 1 2 処分

その後、先生たちのところに行き、罣をすべて解除して僕はおとなしく捕まった。その時の先生たちの驚きようといったら、おもしろすぎて写真に残したいと思ったね。まあ、そのまま矢島君は学校の別館にある保健室に連れてかれ、僕は校長室に再び戻ってきた。その時、僕がまた脱走するんじゃないかと警戒して、入り口に先生が固まっていたんだよね。まったく、一日一回しかやらないつてのに、ずいぶん用心なことですね。うゝん、ここからの会話は全部省略するとして、結果だけ言っとこうか。僕は、一ヶ月の謹慎で、矢島君は一週間の謹慎になりました。僕を捕まえようとして空回りした体育の先生は、減給になったのは僕も驚いたね。校長曰く、『感情に流され過ぎているから』だって。・・・・・・もしかして、この騒動を利用して先生たちの性格をみてたのかな？なんて思いながら、そのまま家に直行したよ。だって疲れたからね。帰ってきたときの時刻は午後三時、昼も食わずに逃げていたから、正直いうと、もうおなかペコペコだよ。』

・・・・よし！！今日は、『高校で初めて謹慎処分をくらった日』として焼肉にしよう！

いやゝ、久しぶりに焼肉だなゝゝ、こんなこともあるつかと、いつもよりも高い肉を買ってきてたんだよなあ、なんて考えながら僕は焼肉の準備をしていた。

・・・・・・あ、ビールが飲みたいなあ。とも思いながら、僕は準備を始めた。

（注！お酒の飲酒は二十歳からだよ！！）

「・・・・・・・・・・・・・・・・ここは・・・・・・・・・・。」

「気が付いたかね。」

ここは別館にある保健室である。そこには、いましがた目が覚めた矢島と、彼が目覚めるまで待っていた校長の二人だけだった。今の時刻は午後四時半。ほとんどの生徒は下校している時刻である。

「何の用だ、校長。」

「君の処遇についてだが、一週間の謹慎だ。」

「あいつは？」

「風間君は一ヶ月の謹慎だ。」

「ふん。退学じゃないのか。」

「確かに退学ものだが、彼の行動のおかげで我々の警備システムに弱点があることが発覚したのでね、それに対してのお礼のつもりだ。・・・それと、月島君がそのまま退学してこともあり得るだろ？」

「ちっ、確かにそうだな。」

「まあ彼は、一般人にしては本当におもしろい『才能』を持っているようだね。」

「？確かに俺は『力』を使ってあいつの顔を殴ろうとしたら、普通のスピードに戻ったけどな。更に言うと、あいつからは外れ者特有の『感じ』が全くなかった。」

「ほう、それはそれは。本当に彼は『特別な才能』を持っているみたいだ。それも、外れ者や一般人という枠を取っ払った『何か』をね。」

「俺は、ただの一般人だと思うぜ。」

「まあそれは、おいおい調べていくでしょう。では、気をつけて帰

りたまえ。」

そう言い残して、校長は保健室を後にした。残された矢島は、

「風間泰輝……次こそはテメエを倒す！」
かざまたいき

時間をさかのぼって、放課後。波風はかせと啓太は、処分を受けた泰輝がそのまま帰ってしまったため、プリントやその他もろもろを伝えるために泰輝の家に行くことになった。その時に、委員長から言われたのが『家に居てもちゃんと勉強しとくように』であった。そんなこんなで、二人は帰る準備を進めていたのだが、ドバン！と扉が勢いよく開いたので中止せざるを得なかった。なぜなら、二人は誰が来たのかわかってしまったからだ。

「なあ、多分あいつだよな。」

「そうね。それと多分じゃなくて絶対よ。」

そして扉が開いた先にいたのは、

「風間！！一緒に帰ろう！！」

と結構はしゃいでいた、月島だった。

「ん？風間はいないのか？」

「あなたは誰なのか知らないけど、風間なら、校長先生から処分を言い渡された後に、意気揚々と帰ったぞ。」

「なに！？もうすでに学校にいなかったのか！？……そうか。」

と肩を落しながら月島が帰って行った。その様子を見た二人は、

「これで大人しく帰ったかしら？」

「さあな。まあ、問い詰められる前に行こうぜ。」

と言って二人は、そそくさと教室を後にして泰輝の家に行こうとしたが、

「待っていたぞ！お前ら！」

校門前に月島がいた。

「どうしようかしら？」

「俺に訊かれてもなあ。」

とやっているうちに、月島が二人に近づいてきた。

「二人とも、風間のところに行くのだろ？ならば、私も連れて行ってくれないか？」

「いやよ。」「いいぜ。」

『・・』

「ちよつと！！何いって言うてんのよ！！」

「いやいやいやいや！！あの子、絶対『力』使ったからな！！それなのに、どうしてお前は断れたんだよ　！！」

「確かに今の言葉に力を乗せたんだが・・・・どうして効かないんだ？」

「私はあなたのこと、嫌いなものよ。だからじゃないかしら。」

「そうか。確かに私も、波風はかせのことは嫌いだな」

「そう。なら、わかっているでしょ？あなたのことは連れていけない。」

「・・・・・・・・それでも、連れて行ってほしい。」

「なぜ？」

「・・・・・・・・風間が起こした騒動の原因は、もともとはわたしのせいだ。だから、あいつに謝りたい。」

「ふふ、あはははははは！！！！」

と、ついていきたい理由を言った月島に対し、波風はかせは思いつきり笑った。そのことに月島と啓太は驚き、啓太はその理由がなんとなくわかってしまったため、笑いそうになり、月島はどうしてだかわからないため波風はかせに対してこう怒鳴った。

「なぜ笑っているのだ！人がちゃんと言ったのに！！」

「ごめんなさい。でも泰輝は、あなたと会わなくても、遅かれ早か

れやるつもりだったわよ。だから謝ろうとしても無駄ってわけ。．．．私にも覚えがあるからね．．．。」

「?どういうことだ?．．．それにしても、どうしてもだめなのか?」

「だめね．．．．．と言いたいところだけど、いいわよ、ついてきても。」

「本当か!―恩に着るぞ、波風^{はかせ}!」

「はいはい。どういたしまして。」

と月島はダメもとでお願いしたのが通って、とても喜んでいた。そこに啓太が、

「どういう心の変わり方だよ。さっきまで嫌がっていたのに。」

「いいじゃない、両手に花だと思えば。そうすれば、あなたが割と告白されることなんてないんじゃないかしら?」

「実際は俺じゃなくて、泰輝の取り合いなんだがな。．．．まあ、泰輝と一緒にいるとこれからも面白そうだから、別にいいと思うがな。」

「そんなところで話してしないで、早く案内してほしいのだ!」

「わかつているわよ。行くわよ、啓太。」

「へいへい。」

と言って三人は泰輝の家に向かった。

1 - 13 これから

今の時刻はなんと五時！いや、焼肉やろうと決めたのはよかったんだけど、火災報知機の誤作動を防ぐために設定し直して、換気扇回して、焼肉セット（と言ってもやくほうのやつ）を探したりして今の時刻になったんだよ。その途中に、波風はかせと啓太と月島さんが家に来て、三人とも上がってもらっている。会話的には、『あれ、それ今晚の準備？』『え？あ、うん。』『焼肉か？だったら混ぜろ！』『ええ！』『いいわね。一人で豪華なもの食べるなんていい身分ね。』『そ、そんなあ……。』と、こんな感じ。月島さんが会話に参加してないって？それは、

「風間の家は、とてもきれいだな。よく片付いている。」
との一言でわかるように、家を探索していたんだよ。僕の家に入った第一声が『意外にこの家広そうだなあ！』だもん。さてと、みんな揃ったところで、焼肉でも始めるとしますか。

焼肉を食べながら、僕は今回の騒動の結末を、波風はかせたちは僕がいな
い間に決まった委員会などの報告、月島さんは謝罪の言葉を言った。
僕としては、謝罪なんていらないだね。やりたいからやっただけ
だし。

波風はかせたちが言うには、僕の役職は、何も無いそうだ。理由を訊いた
ら、『謹慎受けたやつにやらす必要はない』と委員長が言ったから
なんだって。

ずいぶんあっさりしてるね、うちのクラス委員長。なんてことを
話していたら、

「しつつかし、お前の両親は本当に居るのかよ？波風はかせから聞いたんだ
が、ほとんど帰ってきていないんだろ？俺だったら、親戚の家で
過ごすけどな。」

と、啓太が訊いてきた。

うーん、うちの両親、たまに手紙出して来るけど、英語だったり、フランス語だったりとするから、今はどこに居るか分からないんだよね。そのことを話すと、

「……お前、よく寂しくなかったな、そんなんで。」

「いつも思うけど泰輝って、寂しいとか言わないわよね。少なくとも私や誰かの前だと。」

「それは、我慢しているのか？そんな我慢なら、する必要はないだろ？」

と、感想というか、愚痴というか、なんか同情された。……まあ、寂しいと思ったことはあったけど、やりたいことやっていたら、自然に寂しいという気持ちがなくなっただよね。そんなことを思いながら僕は、

「ありがとう。」

と三人に言った。それが意外だったのか、

「お、おう。」「え！いいいわよ、そ、そんな礼なんて！」「ふえ！……！」

と三者三様の反応を示した。啓太、それはさすがに失礼だよ。後、波風^{はかぜ}に月島さん？なぜ赤くなっているんですか？なんか釈然としない気持ちのまま、焼肉は終わった。

その後、啓太は月島さんと一緒に帰って、波風^{はかせ}はまあ、隣だからね、普通に歩いて帰っていったよ。それから僕は、食器を洗いながら、謹慎中に何をしようかなんて考えていると、ピリリリ！！と電話が鳴った。誰からだろうと思ひ、電話に出てみると、

『よう！久し振りだな！泰輝！』

となんだか聞き覚えのある声が聞こえた。っていうか、この声……

「父さん！？」

『応。そうだそうだ。お前の父さんだ。元気にしてたか？』

「元気も何も、今までどこに居たの！？後、母さんも元気なの！？」

『はっはっは！母さんも元気だぞ！って、母さん？あ、ちよっ』

『元気そうで何よりね、泰輝。母さん嬉しいわ。』

「母さん！！僕も母さんたちが元気で何よりだよ！！……ところで何の用なの？いきなり電話なんてしてきて。」

『あなたが高校に入学したとき何も言えなかったでしょ？だから今こうしているの。』

とそれから僕は、両親に昨日の出来事から今日の騒動のことまでを話した。あ、月島さんたちの事も話したんだよ。それを聴いた両親は、

『もう謹慎処分を受けたの？今回はずいぶんはやいわね。』

とそんな感想を言った。それから、最近両親が何をしていたのかを聞いていた。その最後に、

『ああ、最近大きな仕事が片付いてまとまった休みが取れそうだから、来月あたりには帰ってこれるから。』

と言って電話を切った。え！うそ！？帰ってくるの！？なんて思いながら僕は、気付いたら寝る一歩手前までの工程を終わらせていた。

謹慎中に僕は、今回の騒動で使った罍の補充（という名の作製）をしたり、ここまでやれば謹慎が解かれた後でも困らないだろう、というところまで教科書を進めたりしていたんだ。それで放課後に

なると、波風^{はかせ}と啓太、それとたまに月島さんが家に来て、学校での生活を教えてくれた。・・・その三人が来ないと本当にたまに、委員長こと、穂波奏さんが僕のところに来るんだけど・・・・波風^{はかせ}や啓太に来たことは秘密にしてくれて言われたんだけど、なんでだろう？とまあ、そんなこんなで謹慎最終日になったんだけど・・・そこから僕の日常が大きく変わりはじめたんだ。

対談 アイドルツ！×考える人×普通の人が送る日常

「さて始めました。第一回とりあえずクロスさせたら面白いんじゃない？ラジオ！！イエーイ！」

「なんなの一体？」「なんなんだ、これ？」「僕、どうしてここにいるの？」

「ゲストはこの方たち！『アイドルツ！』から、主人公八神つとむ！」

「おいこら。ちゃんと説明しろ。」

「次！」「無視かよ。」

「『考える人』から同じく主人公、風間大輝！」

「あ、どうも。」

「最後に、『普通の人を送る日常』からも主人公、池田連！」

「これはなんなの一体？」

「以上、この三人をゲストとしてお送りします！ちなみに、D」
「は私、末吉がやります！」

「いい加減説明しろ。」

「ドカツ！バキッ！ドオオン！」

「しばらくお待ちください」

「いたた……。これくらってよく生きてるね、あそこの人たち。」

「八神君、だっけ。今日はよろしくね。僕は連でいいよ。」

「だったら俺はつとむでいいぜ、連。」

「じゃ、僕は輝でいいよ！」

「ふう。気を取り直して。じゃ、早速いつてみよう！」

「説明しろ。」ドゲシッ！「グフォッ！」

「作者が泣き出したため、一時中断します」

「さあ！いつてみよう！」

「切り替え早えな。」「タフだね。」「どうしてだろう？……………」

「はっ！」

「さて、記念すべき第一回の上に最初の質問！まずは……………好きな食べ物？」

「ベタ感マックスじゃねえか。」

「うるさいな。で？どうなの？好きな食べ物あるの？」

「誰から訊くんだよ？」

「そうだな。ここはあんまり話さない大輝からいつてみよう！」

「え？僕は……………ハンバーグに、牡蠣に、ケーキに……………」

「十分後」

「……………ドリアに、カルボナーラに、キャビアくらいかな？」

「おい末吉。知ってたか？」

「え？知らなかったけど？」

「キャビアって、高級食材で世界三大珍味だよな？」

「うん。両親が送ってきてくれた時があったんだよ。あれはよかったなあ。」

「……………この庶民の敵が！！……………」

「えええ！どうしてみんな一斉に言うの！？」

「ゴホン。じゃ、次はつとむだ！はい、好きな食べ物は！？」

「俺か。俺はそうだな……………あえて挙げるなら、マスターの賄飯か？」

「マスターって、誰？」

「つとむのバイト先の店長だよ。結構ちゃっかりしてるところあるよね。」

「そうだな。あの野郎、俺が非番の時に来ると割引なしで会計するんだぜ？ちゃっかりしてるだろ？」

「へえ」。でもそれって、その時の契約内容になればやる必要はないんじゃない？」

「まじでかつ！・・・いつきに紹介してもらったバイトだからな。契約内容は詳しくは知らないんだ。」

「そりゃまた。」

「いい人だね。」

「けどな、それ以上に俺が大変な目に遭っているんだぜ？例えば、雪山に何の準備もなしに遭難させられたし、どこか知らない山奥に放置させられて一週間で脱出しろとか・・・」

「

これからしばらくはつとむのトラウマ話がされています」

「・・・ほかにもあるぞ？」

「もういいよ！お願いだからやめて！」

「そうそう！話がだいぶずれてきちゃったじゃない！ほら末吉さん！進めて進めて！」

「分かったよ！では次は連！好きな食べ物は何？」

「僕の好きな食べ物はカレー！」

「定番だね、連は。」

「普通すぎるね。」

「放っておいてよ！」

「末吉。その辺にしろ。連がうずくまっちゃった。」

「ごめんね、連。悪気はなかったんだ。」

「いいんだよ、末吉さん。僕はどうせ普通なんだから・・・」

。

「

「ああ！連がなんだかネガティブに！」

「どうにかしろよ。作者なんだから。」

「分かったよ。」

「連が戻るまでしばらくお待ちください」

「よっしゃ！これで「はやくしろ。次だ、次。」わかったよ……
……では次！三人の共通点は？」

「「家事ができる。」」

「ですよ。」

「ていうか、お前自体は料理そんなにできないだろ？」

「完全に願望だね。」

「人ってどうしてそんなことするんだろ？」

「うるさい！別にいいじゃないか、高望みしても！」

「気を取り直して。次行け、次。」

「うわひどっ！」

「作者が立ち直るまでしばらくお待ちください」

「さあ、次行こうか……………」

「大丈夫？末吉さん？」

「最初っから飛ばしすぎだ。疲れるだけだろ。」

「もうやけっぱちじゃなかった？」

「問題ない！行くよ！質問！一番面倒だと思ってることは！？」

「学校生活。」「両親の世話。」「学校生活。」

「わ」お。話的にはアウトの答えいただきましたー！連を除いて。」

「ん？今何か言わなかったか？」

「別に」。さて、理由は何となく想像できるから置いて。次！

連以外は高校生んだけど、そこどこどう思ってる？」

「別に？俺は、中学生だろうが高校生だろうが大変なことばかり関わっているからな。どうとも思っていないぜ。」

「僕は中学生のほうがいいなあ。そっちのほうが楽しく遊べたから。」

「僕は……………どうなんだろう？先のことを考えてないから」

なあ。」

「そうなのか？」

「うん。」

「じゃ、最後！将来の夢は？」

「平穏な暮らしがしたい。」「サラリーマンになる。」「世界を放浪したい。」

「切実な答えが一人、まじめな答えが一人？そして、ただの願望が一人？」

「誰だか見当はついたが、それはないんじゃないか？」

「ま、いつか。次のコーナー行ってみよう！」

「「これで終わりじゃないのかよ！？」」

「次のコーナーは……『苦労話を分かち合おう！』です！」

「タイトルだけで内容がわかるな。」

「もうちょっとひねったら？」

「そんなことはどうでもいいから！ささ、張り切って話してみよう！」

「じゃ、誰にする？」

「末吉さんからいいじゃない？僕たちを作る時の苦労話をしてみよ。」

「私？そうだね……まあ、苦労というわけではないけど、思いついたら忘れないうちに書き留めようとするでしょ？それをそのまま書いてたら、いつの間にか止まらなくなっただけ。他の作品のやつを考えるのと並行してやってることが、苦労してるところかなあ。」

「そうか。だったら俺のところさっさと進める。」

「僕のところもね。」

「分かってるよ。じゃ、次は……大輝！」

「僕！？うーん、僕は……昔のことなんだけどね。」

「ふむふむ。」

「昔、両親が僕を置いて海外に出て行ったところかな。その時は波風の家に世話になっていただけだね。そのころの僕、まだ小さかったからさ、色々と覚えるのに苦労したよ。」

「子供って、普通は連れて行くものじゃねえのか？」

「なんでも、波風が僕と別れるのが嫌だったらしく、それだったらということ、僕を置いて行ったみたいだよ。」

「すごいね、大輝の両親は。」

「じゃ、次はつとむだ！」

「俺か。そうだな……。ああ、あつたぜ。確か、小学生のころだな。いつきの付き添いで言えば聞こえはいいが、実際は俺のことを強引に連れて行ったわけだ。」

「大変だね。」

「それで俺は誰の誕生日だったかしらないで、パーティに連れて行かれた。しかも、俺だけ私服だぜ？どう考えても目立つわ、なにやら子供はいるけど誰もかれもがドレスやら着てるわで場違いだとすぐにわかったんだ。だから俺はいつきに、家に帰せと言ったら『いいじゃん。別に。』と言われて一蹴された。」

「可哀想だね。」

「それで仕方なく外を眺めてたら、変に金持ち思考のお坊ちゃんが俺のところに来てよ、俺のこと散々変なこと言うんだぜ？俺は気にしなかったけど。ま、その反応に怒ったのか俺のことを殴ろうとしたんだろうな。」

「そういうのって、たいてい男だよな。」「そうそう。」

「そしていざ殴りかかろうとしたら、どうやら主催したやつが来たらしくよ。殴るに殴れずそのままそのまゝそのほうに行ったんだ。あの時我慢するのが苦労したなあ。」

「それでどうなったの？」

「うゝん。そこらへんは思い出せないな。」

「ま、そんなことはどうでもいいさ！次次！」

「じゃ、僕だね。僕は一杯あるよ。例えば・・・・・・・・・・」

三十分後。

「末吉。てめえ、連に苦労しかさせてねえのか？」

「もうやめさせようよ。連が変な空気まとい始めたから。」

「そ、そうだね。・・・・・・つとむ！任せたよ！」

「はあ！？」

「殴れば何とかなるから！」

「・・・・・・分かったよ。連、元に戻れ。」

ドカッ！

「・・・・・・いてっ！・・・・・・あ。ごめんごめん。」

「さて、次は何するんだ？」

「えつとね・・・・・・大変言いにくいんだけど、終了の時間が近づいてるんだよ。だから、今回はこれまで！」

「「はあ！？」」

「まだ二つしかやってねえぞ！」「そうだよ！」「どうしてさ！」

「色々あったじゃない！色々と！そのせいで時間が足りなくなっ
たんだよ！」

「馬鹿じゃねえか！」

「二回目をやるかどうかは気分次第！あとは、質問が来ればやるか
もしれない！以上！第一回とりあえずクロスさせたら面白いんじゃない？ラジオでしたー！」

「勝手にしめるんじゃない！！」

「これから一緒に買い物行かない？近くに安いところあるんだよ。」

「本当！？ちょうど部屋が綺麗すぎて何かほしいなあと思っていた
ところなんだよ！」

「・・・・・・俺も行つていいか？」

「いいよ！」「うん！」

「D」は私、末吉！ゲストは池田連！八神つとむ！風間大輝でした
！アディオス！」

第二話 突然（前書き）

両親、登場です。

第二話 突然

今日で謹慎処分も最終日。罨の製作や、薬品を使った実験など、やりたいことをやっていたから、あつという間に過ぎて行つたんだよね。何はともあれ明日から学校に行けるぞー！なんて思いながら朝ごはんの準備をしていたら、

ピンポン！とインターホンが鳴った。僕は、こんな朝早くにいったい誰が、何の用なんだろ？なんて思いながら朝ごはんの準備をやめて、玄関に向かった。

玄関に着いた僕は、そのままドアを開けてみて驚いた。だって・

・・・

「父さん！？母さん！？いつ帰ってきたの！？」

「よお、泰輝のやつだいぶ成長してんじゃないか？なあ、母さん。」

「そうね。十年振りくらいだから、一瞬誰だかわからなかったわ。」

そう、目の前にはなんと、僕の両親である風間新蔵と、風間由香里がいた。両親の紹介をしなきゃね。えーと、僕の父さんである風間新蔵は、趣味が前にもいったけど、プラモデルや、モデルガンの蒐集といったって普通なんだけど、モデルガンを普通に改造したりして、BB弾じゃなくて普通の実弾を撃てるようにしている。ほら、謹慎を受けることになった騒動の時に僕、モデルガンを持っていたでしょ？あれ、父さんのなんだよね。続いて母さんの紹介。風間由香里は、とても若くみられる。

いや、自慢じゃないよ？本当に。

・・・とにかく、母さんは下手をしたら十代にも見えてしまうんじゃないかと思えるくらい、全体的な雰囲気若い人にそっくり。一度なんでああなのか考えたら、頭がショートしそうになった。

それ以降、僕は母さんについて疑問に思うことはなかった。あ、二人の職業がまだだったね。僕の両親は、科学者であり、発明家。と

まあ、なんか胡散臭いけど、事実なんだからしょうがないよ。・・・
・・・発明家は明らかに胡散臭いけどね。

先程母さんが言ったとおり、両親とは十年ぶりの再会なんだよ。
え？ちよくちよく帰ってきているんじゃないかって？その時僕は学校にいたから、帰ってきたときには書置きしかなかったんだよ。ちなみに、中学2年になるまでは、波風はかせの家に居候させてもらっていたんだ。そのお礼をちゃんとしなさいといけないな。

と、こんな感じで両親の紹介終わり！！そして僕は、一番疑問に思っていることを訊いてみた。

「ねえ、なんでこんな朝なの？」

今の時刻は午前六時。起きているのはたいてい、料理を作っているお母さんぐらいだろうね、きっと。

そんな疑問に両親が、

『時差があつたのを忘れてて、ここに着く予定が昼ぐらいだったんだけどさ、空港に着いたら深夜で、そのままタクシーでここまで来た。』

と一字一句間違わずに答えた。夫婦ってこんなことできるの？なんて思いながら、

「取りあえず、入ったら？」

と両親を家に入れた。

「久しぶりに家の中を見たが、昔と変わってないな。本当に片付いている。」

「そうね。泰輝がいつも掃除とかやっているからかしら。」

家に入った両親が最初にやったこと。それは、僕がちゃんと家をきれいにしているかどうかを確かめることだった。・・・母さんならわかるけど、父さんに家をきれいにしているかなんてみれないと思うんだけど。

だって、今の父さんの恰好が、ヨレヨレのワイシャツにぼろぼろの

ジーパン、ワイシャツの上に着ているのがヨレヨレの白衣。それに、父さんの部屋、ほこりだけはかぶらないように適度に掃除やっているけど、ものをほとんど動かしていないからね？そんなことを思いながら僕は、

「長旅で疲れているだろうから眠ったら？」

と言ったら二人は、

「そうだな。」「そうしましょうか。」

と返して、自室に戻った。

さてと、今のうちに朝ごはんを作って、食べて、使った食器を洗って、いつも通りの朝を過ごした。最終日って暇だね。今五月十日だから…だから何？って、そんなとりとめのないことを考えながら僕は、だらだらと過ごしていた。またインターホンが鳴るまででは。

2 - 2 来訪者とそのわけ（前書き）

新キャラ登場です。

2-2 来訪者とそのわけ

ピンポン！と昼の準備をしようとしたときに、インターホンが鳴った。今度は誰？などと思いつながら玄関を開けたら、

「こ、こんにちは！こ、ここは、風間様のお宅でよろしいんでしょうか！？」

と、超テンパっているメイドの恰好をした不審者がいた。よく見ると、結構な美人で胸も大きかった。それでも僕は、何も躊躇わず僕は携帯を持って、

「あ、もしもし警察ですか？」

「ちよつ、ちよつと！！警察に通報しないでください！！お願いします！！！」

とその不審者は僕の携帯を奪って、そのまま後ろに隠してしまった。だって、メイド服を着た美少女がうちに何の用があるのさ！……・ひよつとするとこの子、不審者じゃなくて、両親に何か用があるのだろうか？と思い、こう訊いた。

「あの、」

「っ！はっ、ハイ！なんでしょうか！？」

「君が用のある、風間さんの下の名前は？」

「えっ！た、確か……『風間新蔵』と『風間由香里』様です。」

「………。」

「あの？どうかしましたか？」

「………間違いない、うちの両親だ。ううん、高校に入ってから大分周りが増えたことになったなあ。啓太は面白いならなんでもよさそうだし、月島さんは何故か僕のことを気に入ったなんて言ってるし、両親は帰ってくるし、メイドの恰好をした人が今まさに目の前にいるけど。とりあえず……」

「うちの両親で間違いないから、とりあえず上がって。」

「え！？よ、よろしいんですか？」

「いいけど、両親はまだ寝てるから、起きるまで待つてね。」

「は、はい！わかりました！」

と言ってその子は家に上がった。

「・・・携帯。」「あ！すつ、すみません！！」

さて、メイド服を着た人を玄関に放つておくと、何を噂されるかわからないから取り敢えずあげただけど・・・もしかするとこの子、とんでもないドジっ娘なんじゃないか、なんて疑っているんだよ。だって、家に上がるときに、

「お、おじゃましま…キャ！！」

「・・・大丈夫？」

「は、はい！問題ありません！」

と服の裾を踏んでこけるんだもん。これってたいていドジな人がやるんじゃないかな？という考え方は偏見ですかね？

その子をリビングに案内して、お茶を入れてあげた。その子は自分でやりたかったみたいだが、入れ方わかる？って訊いたら、すみませんでした、と謝られた。そんなに謝らなくていいのに。・・・あ、すっかり忘れてた！お昼作らなきゃ！この子が来たから、準備だけしかしてないんだ！と僕が慌ててキッチンに行つて昼の準備をししたらその子が、

「お茶、ありがとございました。ところで、今からお昼をお作りになるんですか？」

「うん。君が来たから作っていないんだよ。」

「それはすみませんでした。よろしければ手伝わせていただきたいのですが。」

「え？いいよ、別に。だってキッチンのどこに何があるかなんてわからないでしょ？」

「それはそうでしたね。」

「で、君は誰？どうして両親のことを知っているの？どうしてここに来たの？」

「え！？あ、あのお、いつぺんに訊かれると困るんですが……。」

「あ、ごめんね。取り敢えず最初の質問として無難なのは……君は誰？」

「私の名前は、榊 喜美恵といいます。」

榊さんっていう人は、見た感じ僕と同じ年みたいだな。なんて調理をしながら考えていると、

「あなたが、かさまたいき風間泰輝様ですか？」
といってきた。

「え？ま、まあ、そうだけどさ。敬語で話すのはやめてくれない？僕たち、同じ年でしょ？というか、君、いくつ？」

「え、私は今十五です。それにこれ以外で話したことないので、人との話し方なんてわかりません。」

わかりませんって、もしかしてその年でもうすでに働いてたの？でも、そうだとすると榊さんがメイド服を着ていたのは、それ以外に服がないからかな。と盛り付けをしながら、考えているとまた、

「先ほどもお伺いしましたが、あなた様がかさまたいき風間泰輝様ですか？」

と尋ねてきた。なので、僕は、

「あ、うん。そうだけど……。」

だから何？って、訊こうとしたら、いきなり、

「お会いできて嬉しいです！泰輝様！」

とソファから立ち上って、嬉しそうにしていた。僕は作った料理を運びながら、肝心の要件について訊いてみた。

「で、何のためにここに？時差ボケをおしてまで来たのには、それなりの理由があるんでしょう？」

とテーブルに料理を置いて榊さんの返答を待った。すると、答えというより疑問が返ってきた。

「あの、私海外から来たって言うてませんよ？どうして解ったんですか？それと、」

まだ質問があるの？こつちが訊きいているのに、等と考えて榊さんの言葉を待ったら、

「申し訳ありませんが、昼食をつくってくださいませんか？」

とずいぶん拍子抜けするものだった。まあ、そうだろうと思っていたから、等とは口に出さずに僕は、黙ってもう一人分の料理を出した。

「本当にすみません！何から何までやってもらって。」

「いや、別に君をお腹空いてそいだなあと思ったから。取り敢えず食べながら、事情を話してくれない？」

「あ、わかりました。」

それから僕は、榊さんの話を料理を食べながら、聴いていた。

「………という訳なのでここにいます。」

「へえ、たいへんだったね。」

一応、榊さんがここに来た理由を説明しとこうかな。大体大まかにするとこんな感じ。

まず、榊さん自体はイギリスのカフェでお手伝いしていたんだって。（手伝っていた理由は、自宅だから。）

で、そこをよく利用していたのが、うちの両親。そのためか、単に日本人同士なのか分からないけど、仲良くなっただって。

そして、僕が謹慎を受けて、両親が電話をかけてきたときに、榊さんの両親と一緒に飲んでいたんだって。その時の会話は、

「泰輝のやつ、入学して次の日に停学処分受けたって。」

「あら、今回は結構速かったね。」

「なあ、泰輝って新蔵の息子か？」

「ああ。かれこれ十年もあつてないな。」

「それで元気なのはすげえな。」

「なあに、どうせ色々騒動起こしまくってんだろ。」

「そういえば、停学処分を受けたって聞こえたんですけど、何をしたんですか？」

「ええ。なんでも、入学して次の日に面倒なことに巻き込まれて先

生たちを相手取って逃げていたって。』

『朝露高校ついていやあ、あれか。確か変な力使える奴らがいるところか。』

『なんだそりゃ？』

『それは言えないな。で、泰輝の奴、先生たちを手玉に取ってある程度したら捕まったんだとよ。』

『それなら頷けますね。』

『面白いやつだな。』

『自慢の息子だ。』

『そういえば、お前ら、帰るのか？』

『当たり前だ。久しぶりの休暇なんだぞ。泰輝がどのくらい成長しているのか普通の親なら見たいだろ。』

『そうか。なら、寂しくなるな。』

『向こうでも連絡ぐらい取れるだろ。』

『だがなあ……。』

『なら、喜美恵に行かせたら？あの子、学校に行っても友達いないみたいだから。』

『そうはいつでもなあ。』

『おい、ちよつと待て。話がみえないぞ。』

『あら、私たちは別に構いませんよ？』

『あ、そうなんですか？……。よかつたじゃない、あの子に私たちの故郷を見せられるのよ？』

『けど、学費はどうするんだ？仕送りするのは無理だと思うぜ？』

『そこは私たちに任せてもらってもいいですよ？お金はありますので。』

『よろしく願います。』

『新蔵。うちの娘のこと、頼んだぞ。』

『は？……。まあ、いいけどよ。』

以上。

そんなことがあって、榊さんはうちに居候であり、使用人？でも

あり、どうせなら、ということ、朝露高校に入学したみたいなんだよ。

・・・・そういえば、僕が謹慎中に転入生が来るって話が、穂波さんが言っていた気がするな。確かクラスがAで、僕と同じクラスだとも言ってたな。もしかすると、父さんたちが何かしたのかな？

・・・・やめやめ！これ以上考えても仕方ない！

そんな訳で、榊さんはこれから家で世話になるようだ。説明終わり。

2 - 3 我が家の異常（前書き）

タイトルが、思いつかない……。

2 - 3 我が家の異常

お昼を食べ終わったので、片付けをしていると、両親が起きてきた。「ふあゝあ。久しぶりに家で寝たなあ。あっちにいた時は忙しくて、研究所で寝てたな。」

「本当に久しぶりですね。なんか新鮮な感じがしますね。」

「おはよう、って訳ではないけど、よく寝てたね。」

「こんにちは。それと、この度は私を日本に連れて来てくださいます。ありがとうございます。」

「いや、別に。」「そうですよ。」

なんて会話していると、父さんが、

「何で、メイド服なんて着ているんだ？」

と訊いたら、

「私この服以外持っていないんですよ。」

と言ったので、

「じゃあ、三時頃まで寝てから、服などを買いに行きましょう。」

と母さんが言った。そのことに榊さんが、

「え！？い、いえ、そこまでしてもらわなくても！！」

と慌てていた。

「榊さん。」

「はい！」

「ここは素直に受け取っておくべきだと思うよ。ここで生活するのに、それだけだと大変でしょ？」

「あ、はい。そうですね。じゃ、じゃあ、お言葉に甘えまして……。」「と僕の説得に応じてくれたのか、榊さんは折れた。そして榊さんは、ソファに倒れるように寝た。」

「速攻だね。」「よほど疲れてたんだな。」「そうですね。」

とその寝顔を見ながら僕は訊いてみた。

「どうして榊さんを家に居候させる気になったの？」

それに答えたのは、やっぱり母さんだった。

「それはね、私たちがまたどこかに行っても、寂しくならない様にするためよ。」

「そうなのか？」

と、とても不思議そうな顔をしている父さん

がいつてきた。え？父さん？頭、大丈夫？なんて思っていると、

「俺が聴いた時とだいぶ違うんだが……。」

とつぶやいた。あれ？ひよっとすると母さん、嘘ついてた？っその気持ちを察したのか、母さんが、

「もう、余計なことを言わないで！」

と怒っていた。つまり……。

「母さん、本音は？」

「仕方ないわ。言いましょう。本当の理由は、泰輝に女の子と同棲してもらって、女の子を意識してもらおうかなって。」

……。……。イマ、ナントイッタ？同棲？榊さんと僕が？

「ちょ、ちょっと！！帰って早々いきなり何！？」

「あら？同棲と言っても、私たちもいるからまあ、居候と考えてもらって、女の子を意識してもらおうかなって。」

「……。……。ハア。」

もうどうしようもないね、この状況は。周りから固めていくんだもん。さすが僕の両親だね。……。でもね、

「電話で話した通り、波風はかせや月島さんが来るから、話がややこしくなるような気がするんだけど……。。」

「大丈夫よ！私たちがそこらへんは何とかするから。」

絶対ややこしくなるな、とそう思えてしまっでどうしようかと僕は悩んだ。

時刻は午後三時。榊さんは目を覚まして、両親は榊さんに制服や、他の洋服を買ってあげながら、町の案内をしてくるって言っていたので、現在家にいるのは僕だけです。さてと、先程、両親が言っていたことについて考えようか。

女の子を意識させる？という意味なんだろう？考えられるとすれば、僕に彼女でもつくらせたいのかな？それとも、僕にこれから女難が出るから、そのための予行かな？なんて予想は立てられるけど、どれもしつくりとこないんだ。うーん、どういう意味なんだろう？と僕はリビングで考えていると、ピンポンとインターホンが鳴ったので、僕は考えるのをやめて玄関に向かった。

「明日からまた学校に行けるわね、泰輝。」

「そうだね、波風^{はかせ}。」

「相変わらず元気そうだな、泰輝。」

「啓太こそ、今日も告白されたんじゃないの？」

「今日はされていないわよ。だいぶ断ってたから、しばらくは告白されないんじゃないかしら。」

「だといいいけどな。」

「あははは。まあ、上がつてく？」

「ああ。」「ええ。」「うむ。」

「あ、月島さん。元気？」

「まあ、普通には元気だな。しかし明日から学校だったら、矢島がそちらに行くかもしれないんだが。」

「心配？矢島君が。」

「私はお前の心配をしてるのだ！なぜ気付かない！？」

「それはどうも。だって、矢島君は同じ特別クラスでしょ？だからそう思ったんだよ。」

「ふん。私はあいつが嫌いだ。なぜなら、泰輝に危害を加えようとしたからだ。」

僕としてはそんなこと思ってないんだけどね。ただ喧嘩しただけ

って認識かな。

そんな会話をしていると、

「さっさと家に入れなさいよ。」

と波風はかせが怒るのを我慢していますって雰囲気だった。なので、

「どうぞ。」

とみんなを家に招いた。・・・予想はしていたけど、事態はややこしくなっていくんだよね。

『お邪魔します。』

と行って、三人とも家に入ったんだけど、

「あれ？なんか家の雰囲気変わったのかしら？」

「ふむ。そういわれてみればそうかもしれん。」

と波風はかせと月島さんがいった。・・・女子の勘って結構鋭いとき、

あるよね。どうしてなんだろうね？なんて考えている暇じゃない！！

「え？何処が変わったの？」

「俺はわかんねえんだけど。」

と何とか平常心で言ってる僕と、本当に分かっていない感じで、啓太が言った。しかし女子二人は、

「いや、変わっているわよ。例えば、使われている食器の数。普段ひとりなんだから、そんなに使う必要なんてないのに、一人分にしたら多すぎるわよ。」

よく見ていますね、波風はかせさん。と僕は心の中で感心した。波風はかせの

話は続き、

「それに、洗濯物の量がとても多いわよ。いつもきちんと洗濯して干しているのだから溜まっていたのをはした、なんて言い訳は使えないからね。・・・泰輝、何を隠しているの？」

と、僕に顔を近づけて波風^{はかせ}が言った。は、波風さん！？顔が近いからね！なんて慌てながら、何故か僕は、波風の顔つてやつぱり綺麗だよなあとか、いい匂いするなあとか思っていた。・・・これだけだと、僕つて変態なじゃないかって、疑われても仕方がないよ。うな気がするな。そんなんじゃないけど。だって、波風つて結構な美人なんだよ！？間近で見られたら、僕でもドキドキしちゃうよ！？なんて一人でやっている、月島さんが、

「何を二人で見つめているのだ！？泰輝！そんなに見つめたいのなら、わたしとやれ！」

となんか我が儘っぽいことを言った。それで我に返ったのか、

「え！？べ、別にそんなわけじゃなくていたわけじゃないわよ！！泰輝が何を隠しているのか知りたいからやっていただけで・・・」

波風^{はかせ}が顔を赤くしながら、言っていた。

そこで啓太がようやく、

「で？泰輝は何を隠しているんだ？」

とニヤニヤしながら言うてきた。君、楽しむ気満々だね。しかも隠す気ないでしょ。と思いながら僕は、

「なんのことかな？」

とはぐらかす事にした。どうせばれるんだろうけど、せめてもの抵抗つてやつをやってみただけど・・・、

「教えるよ。」「教えなさいよ。」「教えてくれ。」「

と三人には通用しなかった。・・・せめてもの抵抗つて、通用する人いるのかな？なんて思いながら、僕は事情を説明した。

「仕方ない。実は・・・」

2 - 4 両親と外れ者

「・・・・・・・・・・という訳なんだよ。」

と嘘偽りなく話したんだけど……どうも納得していなさそうな人たちであつた。

「嘘じゃないの?」

「嘘なわけないよ。そんなことしたら、波風が僕のことは殴るだろ?」

「そうだけど……でも、わたしはあんたの両親を見たことがないのよ? どう信じればいいのよ?」

と言つていたら啓太が、

「じゃあさ、本当かどうか皆で待つてのは、どうだ?」

「いいわね。」「そうだな。」

と、啓太の提案で事の真相を明らかにするべく、三人とも家に残つた。そえば……、

「月島さんつて、一人暮らしなの?」

「なんだいきなり? ……まあ、そうだが。」

「へえ、あんた、一人暮らしできたんだ。」

「それぐらいできるわ! そういうお前こそ出来ないのではないか!」

「それぐらいできるわよ!」

等と言ひ合つてしていると啓太が、

「なあ、この前の騒動でお前が逃げている間に波風から聞いたんだが、お前の両親は科学者なんだつてな。何を研究していたんだ?」

と訊いてきた。何を研究していたか、ねえ……。ううん、確か……

「確か、『人間の潜在能力はどのくらい眠っているのか』についてだ、つて言つてた様な気がする。」

『は?』

と僕の一言で言い争つていた二人も、ぼかんとした表情で僕の方を

向いてきた。

「えつとお、十年前に訊いたからよく憶えていないんだけど、僕たちには潜在能力があるって、よく言うじゃない。もしそうだとしたら、どのくらい眠っているのか、どの様にして引き出すか、どの様な能力なのか、ってことを研究しているって言ってたんだよ。」

「となると、何か？俺達にも何か能力があるっていうのか？」

「うん。そうなるね。」

と話していると、

「その原理でいくと、私の力も潜在能力ということになるのか？」
と月島さんが訊いてきた。だから僕は、

「うん。そうだろうね。」

と返した。とそんな事をしていたら、

「ただいま。」「ただいま帰りました。」「そんなに畏まらなくてもいいわよ。榊ちゃん。」

とうちの両親と榊さんの声が聞こえた。

「あ、帰ってきた。」

「さて、さっきの説明は本当かどうか分かるな。」

「そうね。」「そうだな。」

この段階で、僕はいろいろ諦めていた。だから、これからをどうするかについて考えていたんだけど……、

「ただいま……って、うお！理江ちゃんは分かるが、他の二人は誰だ？泰輝の友達か？」

「あなた、他の二人は木島君と月島ちゃんでしょ？忘れたの？」

「おお、そうか、そうか。……それにしても、泰輝にはもったいない人たちだな。」

「父さん、それどういう意味？」

なんて話していると、啓太が、

「おい。誰が泰輝の母親なんだ？」

え？誰って……、

「父さんの隣にいる人だよ。」

なんて言ったら、三人とも、

『はあ！！！？』

と声が重なった。榊さんが怯えていますから、とりあえず落ち着こう、ね？って、言おうとしたら、

「おまつ！どう見てもお前の親父、犯罪者にしか見えないんだけど！！？」

「そうよ！！どう見ても十代そこらじゃない！？」

「そうだぞ！泰輝！！嘘つくんじゃない！！！」

「本当の事だからね！！！」

なんて言っていると、

「なあ母さん？俺っていつも犯罪者扱いされるよな…。」

「いつもの事じゃないですか。」

「慣れていてもきついんだって…。。。」

と二人が会話をしていたのを聴いて再び、

『え、ええええええ！！！！！！』

と三人分の絶叫が響き渡った。

「皆さん初めまして。私が泰輝の母で由香里といいます。これから泰輝のことをよろしくお願いしますね？」

「そして俺が、「私の夫で、新蔵と言います。あ、決してロリコンではありませんからね？」

って、母さん！自分で紹介できるからね！？人の台詞を奪わないでね！？」

「だって、あなたが紹介するところなことを言いかねませんので…。。。」

などと和やかに言い合っている二人。それを見て啓太が、
「本当だったんだな。・・・初めまして俺の名前は、木島啓太です。」

「
」
続けて、

「私の名前は波風^{はかせ}理江です。」

「私は月島カリアだ。」

と自己紹介をしたんだけど………

「あら、理江ちゃんは私たちの事、憶えていないの？最後に会ったのが十年前だから仕方ないかしら。」

「え？」

「月島ちゃんは『外れ者』だからここにいるんでしょう？」

「ああ、そうだが………どうして知っている？」

と、母さんは波風^{はかせ}とは十年前まではあっていたと言っ、月島さんは外れ者だと言いつてた。

ちなみに、榊さんにはとりあえず、自分の部屋に行ってもらって、荷物の整理をしてもらっている。さっきの場面に戻ろうか。

母さんが言い当てたことに驚いていたが、月島さんが、

「答える。」

と声に『力』を加えて言った。しかし、

「ふふ、何故でしょう？」

と笑みを浮かべて言った。というか、あれ？母さん？どうして効かないの？と両親以外が不思議に思っていると、

「科学者として、だてに世界中転勤したりしてねえよ。なあ、母さん？」

「そうね。でも、効かない理由は、朝露高校で先生として働いていたからじゃないかしらね？」

とあっさり理由をばらす両親。ん？今ちよつと聞き逃せない台詞があつたよう………

「あの。」

「なんだ、木島君？」

「朝露高校の特別クラスで教師やっていたんですか？」

と、啓太が訊いた。そうだ、それだ！ナイスだよ、啓太！と思つて

いると、

「教師というより講師よね？」

「講師という名の研究者じゃないか？」

と、二人揃ってとぼけていた。もしかして、僕の事、試してる？仕方ないなあ、もう

2 - 5 両親の過去

「そんなに言いたくないんだったら僕が推測を話すから。間違っていたら訂正してよね、二人とも。」

「ほう、推測を話してくれるのか。それは楽しみだな。」

と父さんが言ったけど、僕は無視して語りだした。

「まず確認したいんだけど、父さんたちは、潜在能力の研究をしているんだよね？」

「ああ。」「そうよ。」

と肯定する二人。それで合っているなら、大体は当たりだろうと思つて僕は続けた。

「なぜ、父さんたちに月島さんの力が効かないのか？それは、朝露高校で特別クラスの先生をやっていたから。なら、なぜ朝露高校で先生をやっていたのか？その理由は、」

と言いながら僕は、探偵の解決シーンってこういう感じなんだろうなあ、とか、こういうのってやってみると楽しいなあ、とか思っていた。そこで波風^{はかせ}が、

「理由は？」

と急かしてきた。はいはい、分かっていますよ。

「理由は、先程僕が確認したよ。」

「確認した？うーん……」

と、啓太たちが唸っているけど、

「やられたな。母さん。」

「そうね。私たちの負けだわ。泰輝、本当に成長したわね。」

「それはどうも。」

と、僕達だけは理解していた。すると、

「あ、なるほど。そういうことね。」

と波風^{はかせ}が納得して、続いて月島さんが、

「ふむ。そういうことか。」

と、納得した。ただ一人、啓太だけが、

「わからん。どういうことだ？」

とつぶやいていた。それを聴いた父さんが、

「仕方ない。説明してやるよ。」

と言つて説明しだした。

「さて、泰輝が最初に、俺たちにこう訊いてきただろ？『まず確認したいんだけど、父さんたちは、潜在能力の研究をしているんだよね？』つてよ。」

「ああ、そうだけど・・・それと何の関係が？」

「分からないのか？俺たちは、その研究の一環として、朝露高校で特別クラスの講師をやっていたんだ。」

「ああ！そうか！そこで泰輝の両親は、特別クラスの連中の力について調べていたから効かないんだな！？」

「その通りだ。」

と、啓太も答えがわかったみたいだ。・・・ちなみに、月島さんが僕のことを『泰輝』つて呼ぶようになったのは、謹慎中にいろいろあったからで、月島さんは自分のことを『カリア』と呼べ、つて言っているけど、僕としては、彼女じゃないんだから呼ぶ気はさらさらないんだけどね。・・・また話が脱線したから戻すよ。

「ふむ。そう考えると泰輝に我々の『力』が効かないのも納得できるな。」

と月島さんが言うつと、

「え？本当かそれ？」

と、お父さんが驚いた顔をしていた。・・・え？なんて思っているつと、

「あなた、ちよつと。」

と言つて母さんが、父さんを引つ張つてリビングを出た。えゝと？何か父さんが変なこと言つたのかな？と思つていたら波風が、はかせ

「そつといえ、泰輝の両親とは十年前まであつていたわね。」

と言つた。それを聴いた啓太が、

「どんな人たちだったんだ？」

と訊いていた。それに対して、波風はかせはこう答えた。

「そうね。あの人たちは、大人になりきれしていない子供って感じだったわ。」

「どんな？」

「例えば、鬼ごっこをやっていた時にも平気で混ざってきたり、夏祭りの時なんて、射的にむきになって三千円ぐらい使ってたわね？」

「うん。確かにそうだったね。あと、僕たちまだ幼かったのに、薬品の取り扱いについて教えられたよね。」

「ああ、あれね？あれは結構危なかったわね。泰輝がいきなり硫酸ぶちまけた時には、心臓が止まるかと思ったわ。」

「そんなこともあったね。」

なんて思い出話をしていると、

「恨め……うらやましい。」

と月島さんがつぶやいていた。こればかりは、ねえ？と、そこで両親が戻ってきた。

「あははは。いやあ、月島さんの言う通りだよな、母さん。」

「そうですね。」

と言ってきた。他の三人は、

「やっぱり。」「そうなのか。」「すごいな。」

と言っていた。……悪いけど、僕は別の理由だと思うよ。その気持ちを知られたくなくて僕は、

「そろそろ榊さんが荷物を整理し終わっている頃じゃないかな？」

と両親に言った。すると、

「やっと終わりましたあ。」

と疲れた様子で榊さんが、リビングに来た。

2 - 6 友達

「あ、あの、は、初めまして！わ、私の名前は、榊喜美恵と言います。え、えつと、よ、よろしくお願いします！」

と言つて、榊さんはお辞儀した。それを見た三人は、

「俺の名前は木島啓太だ。よろしくな。」

「私の名前は波風理江^{はかせ}よ。これからよろしくね、榊さん。」

「私は月島カリアだ。よろしく。」

と挨拶した。その後波風と月島さんは、榊さんに聞こえない声で、

「（・・・結構スタイルいいわね。）」

「（そうだな。泰輝があんな子がタイプだったら、どうする？）」

「（そんなこと言つたつて、どうしようもないじゃない。）」

ん？何を言っているのか分からないけど、『スタイル』とか『タイプ』とか聴き取れたな。それがどうしたのかな？と思つていたら母さんが、

「そんなことないわよ。二人ともそれぞれ魅力的だから、頑張つていけばいいのよ。」

『！！！？？？』

と言つたら二人とも驚いていた。・・・だから何の話なの？と訊いたら殴られそうだからやめとこう。そう決めていたら啓太が、

「なあ、榊さん。」

「は、はい！な、なんででしょうか！？」

「イギリスから来たんだつて？あつちでの生活はどうだったの？」

「え、えつとあ、私の両親がカフェをやっていたんで、その手伝いをしていたり、学校に行つたりしていました。・・・でも、その時には友達がありませんでしたけど・・・。」

「そうか。でも、今はもう俺達は友達だと思つているぜ。なあ？」

「ええ。」「うむ。」

「え！？」

と、啓太の言葉に頷いた波風と月島さんに、榊さんが驚いていた。そして、

「え、いいんですか？私みたいなのが友達で。」

「いい、悪いじゃなくて、仲良くしたいか、どうかだ。」

と、啓太が格好良いことを言った。こういう時、格好良い人って得だよな。と思っていると、

「そ、そうですか・・・」

と、榊さんがちょっと引いていた。あれ？なんで引いてるの？なんて疑問に思っちゃったから、可能性が次々浮かんできちゃったよ。こうなったら、僕に話が振られない限り、一番しつくりくる推測でも考えるか、と考えることに集中した。

以下の会話は僕抜きです。

「ねえ、啓太のせいで榊ちゃん引いちゃったじゃない。」

「そうだぞ。啓太が悪い。」

「おい。二人揃って、なんだよ、それ。俺が悪いみたいになっくんじゃないか。」

「みたいじゃなくて、悪いのよ。」「うむ。」

「あ、あの、皆さん、落ち着いてください。」

「っていつかさ、波風と月島はいつの間に意気投合したの？」

「してないわよ！」「そうだ！」

『誰がこんな奴と！！』

とさらに喧嘩に拍車をかける二人を見て、

「若いつていいわねえ。」

「母さん。」

「なにかしら？」

「榊の奴、やつぱり・・・。」

「そうみたいね。でも、いいんじゃないかしら。ここで生活する」とが。」

「・・・そうだいいな。」

と、榊がどんな人なのか確信を持った二人がそんな会話をしていた。

2 - 7 思惑交じりの外泊（前書き）

久しぶりに投稿します。すっかり忘れていました。

2・7 思惑交じりの外泊

「大体、あんたは泰輝の気持ちのことを一切考えないで、自分の気持ちだけ伝えてるだけじゃない！そんなことだとすぐに愛想尽かれるわよ！」

「っ！だ、だが！お前こそ自分の気持ちを素直に伝えないだろ！そんなんじゃ、泰輝と付き合うのは無理だろ！！」

「な、なんですって！あんたに言われたくないわよ！」

「なんだと！！」

「なによ！！」

「本人を目の前にしてよくそんなこと言えるよな、お前ら。って、あれ？泰輝は？」

「そういえば……。」「泰輝は何をやっているのだ？」

と、啓太が泰輝が喋っていないことに気づき、波風と月島は、我に返ったように泰輝を探し始めた。

「あの、そこにいますよ。」

「お、本当だ。おい、泰輝。聴いてるか？」

「……………へっ！？な、何か用！？」

「いや、話に加わってないからどうしたのかな、と思って。」

「ああ、ちよつと考え事を、ね。」

「そうか。じゃあさっきの会話は聴いていないんだな。」

「ちよつ、啓太！？」「何を言う気だ啓太！？」

「？さっきの会話って何のこと？」

「よかったな、二人とも。聴いてなくて。」

「う！まあ、そうだけど……。」

「う、うむ。確かにそうだが……。」

「ねえ、いったい何を話していたの？」

「気にしないでいいわよ。」

「ねえ、」

「気にしなくていいって言っているでしょ！」

「う、ごめん。」

なんてことをしていると母さんが、

「もうみんな帰ったらどう？五時くらいになるけど。」

と、時計を見ながら言った。

「ああ、そうだな。じゃあ、俺は帰るわ。また明日。」

「うん。またね。」

「では、私も帰ろうか。泰輝、今日こそ一緒に帰ってもらうぞ。」

「その子を送ってあげたら？」

「母さん？別にいいけど・・・料理は？」

「それは私達でもできるわよ。榊ちゃんにも手伝ってもらいながら、
ね。」

「そう。ならいいか。じゃ、行こうか・・・って、あれ？月島
さん？啓太？波風？^{はかせ}どうしてみんな固まっているの？」

「いや、お前の話が全部本当だったんだな、と思ったから固まった
だけだ。」

「もう、まだ疑っていたの？」

と二人で話していたら、

「ねえ、泰輝？」「なあ、泰輝？」

「ん？なに？二人とも。」

と波風^{はかせ}と月島さんが同時に訊いてきた。この後の展開が、なんとなく
くだけど読めてしまった僕は、二人が聴こうとしていた内容をさえ
ぎって、

『今日、泊めても

「泊めるのはダメだよ。だって明日も学校があるじゃないか。」

「泰輝の馬鹿！なんとなく分かっていたけど、酷くない！？」

「そうだぞ！酷いではないか！」

「二人が何と言おうと、駄目なものはダメだからね。大人しく帰っ
てもらえないかな？」

「あら、私はいいわよ？」

「ちよつ、母さん！？何言ってるの！？」

「何って、理江ちゃんとは十年振りだからお話ししたいし、キャリアちゃんとは泰輝について話したいから。」

「やった！」「やったのだ！」

「父さん！？なにかいってよ！？」

「ん？別にいいんじゃないか？でも着替えとか持ってこないと駄目だろ？」

「あ、あの、皆さん？」

「じゃあ、俺、帰るわ。感想は明日会ったらきくからな。」

と言つて、啓太は帰って行った。波風は『はかせ両親に言ってくる。』と言つて母さんと一緒に行つちやつたし、父さんは『料理作るから榊ちゃん、手伝つて。』『え！？あ、分かりました！！』と言いながら、榊さんと夕飯作りにキッチンに行つちやつたよ。久し振りに思うよ。

.....神様、あなた、僕のこと嫌い？

そして僕は、嬉しそうな月島さんを家まで送って行った。

第三話

「夕飯まで一緒にいいんですか？」

「構わないわよ。どうせ泊まるのだから。」

「ねえ、結局僕が作ることになったじゃないか。父さんたちが作るんじゃないの？」

「いや、それがよ……。いざ作ろうとしたら、あっちの生活が長かったせいか、作り方を忘れてな……。」

「見栄を張らないでね、全く。」

「まあ、泰輝の腕がどんなものか分かるからいいか。」

「僕としては、楽をしたいんだけど……。」

この会話でわかるように、僕が料理を作つて、他の人たち（両親と波風と月島さんと榊さん）が待っている状態。六人分を作るのも楽じゃないんだけど、待たせているんだから作らないと駄目だよな。

月島さんと榊さんは、二人仲良くテレビを見ていた。最初は、二人とも警戒（榊さんはオドオド）してたんだけど、母さんが「仲良くしましょう？」と言ったら、月島さんから話しかけたんだよな。

で、今のこの状況つてわけなんだけど……。なんでいきなり二人とも『泊まる』なんて言い出したのか分からないだよな。どうせ訊いても答えてくれないし、もうそのことについて触れるのはやめよう。と思いつつ僕は料理を作つていった。

「できたから、みんな運んでよ！」

と言って、僕は作った料理を運んでいるんだけど……。父さん以外はみんな話していた。

「……父さん、手伝つて。」

「お、応。分かった。」

と僕の声が怖かったのか、父さんはビビりながら返事をした。

二人だけで料理を運んでいたら、

「あ、ご、ごめんなさい気が付かなくて。て、手伝いますよ?」

と言いながら、榊さんがこっちに来た。

「うん、助かるよ。・・・あ、これ、お願いするね。」

「はい、わかりました。」

と言つて、榊さんは料理を運んで行った。・・・榊さんは気が利く

なあ、と思つて僕も料理を運んでいたら、

「榊ちゃんの良いお嫁さんになれるわね。」

「ええ!? な、何言ってるんですか!？」

と母さんが茶化して、榊さんが慌てた。・・・危なかったあ。料理を運んでる最中にそんなこと言われたら、料理をぶちまけちゃうんじゃないかな?なんて、思っていると、

「しょ、しょうがないわね。だったら、私も手伝うわよ。」

「うむ。私も手伝うか。世話になるからな。」

と言つて、波風^{はかせ}と月島さんは手伝いだした。

正直言つと、僕が最初に言つた時に手伝つてほしかったよ。・・・

でもなんで急に手伝う気になったんだろ? そう思いながら、僕は波風^{はかせ}と月島さんに料理を渡していった。

料理がすべて、テーブルに並べられたので、

『いただきます。』

と全員で言つて、食べ始めた。

「おお! 泰輝の料理を初めて食べたが、旨いなあ!!」

「そうね。とてもおいしいわ。」

「ありがとう、二人とも。．．．でも、この人数で食べるのは初めてなんだけど。」

「そうなのか？」

「うん。だって、小さい頃は波風なみかぜの家で食べていたし、中学生になつて一人でここにいた時は、僕だけがほとんどだったから。それに、外食もしていたしね。」

「ふゝん。そのお金は？」

「お父さんたちの預金から。あとは、自分の預金から、かな。」

「なんて、僕と両親は和やかに食べていたんだけど、

「なあ、泰輝の料理食べたことあるのか？」

「あるわよ。女のプライドをスタスタにする位、おいしいわよ。フフ．．．．．。」

「お前．．．．．。なら一緒に食べようか。」

「シヨックを受けないでよね。」

「そっちこそ。」

と、覚悟を決めた感じで二人は食べた。そんな二人をよそに、

「あ、これ、本当においしいです！泰輝様が作ったのですか！？」

「うん、そうだけど．．．．『様』はなしにしてください？」

「それなら『泰輝さん』でどうでしょうか？」

「別にいいよ、それなら。」

と、純粹においしいことを評価してくれた。

喜んでもらえて本当に良かったあ、なんて思っていると、

「ま、負けた．．．．．。」

「言ったでしょ？料理を食べてシヨックを受けないで、と。」

「た、確かにこれは、私たちのプライドをボロボロにするな。」

「ちなみに、泰輝は両親が帰ってくるまでのほとんどが、自炊だからね。」

「な、なにかやるせない気分になるな。」

「でしょ？上手くなつたから料理を作つてあげようとしたら、その

上をいかれた料理を作られてどうしようもなかったわ。」

「そればかりは同情する。」

などと、そこだけ悲壮感が出ている会話をしていた。

・・・そんな僕に料理が口に合わなかったのかな？だとしたら、もうちょっと上手くならないと駄目かな？と考えながら、料理を食べていた。

3
-
2
波風の思い出

料理を食べ終えたので、片付けをして、みんなでちよつと休憩をしていた。その時に僕は、明日の準備をするのを忘れていたことに気付いた。なので、

「あ、明日の準備をしてから、みんな休憩していいよ。」
 と言って、僕は二階の自分の部屋に行った。

だから、僕はそのあとの会話を知らないんだよね。

泰輝が二階に行ったのを確認してから、由香里はいった。

「泰輝がいなくなったことだし、思う存分話しちゃいましょう。」

「母さん、何をだ？」

「あなたは聴いてるだけでいいわよ。．．．じゃあ、理江ちゃん、あなたからしようかしら。」

「へ！？な、何をですか！？」

「何って、泰輝のこと好きなのでしょ？カリアちゃんも。」

「！！？・・・そ、そうだが・・・。」

「なら言っちゃいなさいよ。私達は聴いているだけだから。じゃあ、はい理江ちゃん。」

「私からですか……。えっと、ですね、あれは中学一年の頃の話なんですけど、私はその時あまり人と話さなかつたんです。それなのに、何故か男子から告白を何度も受けてたんですよ。」

「自慢か？」

「そんなわけないわよ。断るのに苦労したわ。」

「青春ねえ。・・・・・・続けていいわよ。」

「分かりました。．．．．そのことに嫉妬でもした女子の中に、私を犯罪者扱いしようとした人がいたんです。その子は、学校では優等生として通っていましたから、そんな事を考えていたことに気付かなかったんでしょね。」

「大変だな、お前も。」

「それは同情してくれているの？そんなある日、一人で買い物をして終わったから帰ろうとしたら、その子がたまたまいて、私に向かつて『この人万引きしました！』と言ってきたんですよ。身に覚えがないから『やっていない』と言ったら、『証拠はあるのよ！』と言って買い物袋から買った覚えのないものが出て来てね、次の日には先生に呼ばれて、クラスでも私に話しかけてくる人がいなくなっただわ………泰輝以外は。」

「大変だったわね。」

「そうですね。……でも、泰輝さんはどうして話しかけてくれたんですか？」

「それは今から話すわ。……それで、泰輝は私が犯罪者扱いされているのにもかかわらず、一緒に帰ろうとしたり、普通に話しかけたりしてきたんですよ。ある日、泰輝が友達と話しているのをたまに立ち聞きしたんですよ。」

「どんな内容だったのですか？」

「そうね……たしか……『なんで波風^{はかせ}に普通に話しかけてるんだ？あいつ、万引きしたんだろ？』『え？僕は波風^{はかせ}が万引きをし

ていないと信じているから、普通に接しているんだよ？それに、犯罪者扱いされて態度が変わるなら、本当に友達とは言えないよ。』

『そうだけどよ……じゃあ、なにか？他に犯人でもいるのか？』

『ははは。もう少ししたら、分かるかもしれないよ。』『は？』だったわ。その時の会話を聴いて私は、泰輝は私のことを信じてくれていたんだ、と思ったら、胸が熱くなっちゃって、これが好きになるってことなんだなって考えて以来からですかね。泰輝のことを好きになったのは。」

「？僕がなんだって？」

「！！！！？？？な、なんであんたがここにいるのよ！？」

「なんで、って……明日の準備が終わって、ついだから風呂を沸かしに行って、それが終わったから戻ってきたんだけど……」

「ど、どこから聴いてたの!？」

「話なんてほとんど聴いてなかったよ。波風はかせの話が終わった時に、僕の名前が聴こえたから会話に加わったんだけど。」

「そ、そう、それならよかったわ……。」

「波風はかせはどうして安堵しているのかな? そんなに僕に聴かれなかった話なのかな? と思っていたら、

「それで、どうなったんですか?」

「由香里さんたちは聴いているんですね? 泰輝から。」

「そうね。確か泰輝が校長室に普通に入って行って、『万引き犯は波風はかせじゃない! あんたたちは騙されているだけだ!』と、怒鳴って校長室を飛び出していったのよね?」

「ん? それって……。もしかなくても中一の頃の話だよな?」

あの時は、商店街の人達が『最近、万引きがひどいんだよなあ。』

という会話をしていたから、誰かな? と思って、いろいろ調べていた矢先に、波風はかせが万引きしたって聞いたから、何の冗談かと僕は怒っちゃたんだよね。そこから本気で万引き犯を調べて、真犯人がわかったから、校長及び他の先生にわざと僕を追ってこさせるような言葉を言って、僕が逃げて行く先々で真犯人の証拠を置いて行ったんだったなあ。

あれやると楽しくなっちゃってさ、それ以降ずっとそのスタイルでやってるんだよね。と僕の回想を放って置いているのか波風はかせが、

「そうなんですよ。それでそのあとは、泰輝は逃げながら、その子が万引きしている様子や、その子が犯人である証拠を次々と残していったんです。それで最後は大人しく捕まって、『ね? 波風はかせは犯人じゃないでしょ?』って笑顔で言ったそうです。その時の処分は確か、教師を数名けがをさせたけど、初犯だからという訳で注意だけで終わったのよね?」

と僕に訊いてきた。僕の代わりに父さんが、

「ん? そうだっけか? 確かその時は停学一週間じゃなかったか?」

と答えた。それで僕は、

「そうだったはずだけど……」

「あれ？私、間違ってた？」

「うん。初犯でもね、僕は入学してから最初のほうで注意を受けていたんだよ。」

「え？そうなの？」

「入学して一ヶ月したときかな、ちょっとした乱闘騒ぎがあったじゃない。」

「ああ、あれでしょ？なんか校庭で男子数名が喧嘩してたの。まさか……」

「そう。僕もあの時その場に居てね、そのままやってたら先生たちに怒られちゃったんだよね。」

「なんでそんなことをしてのよ。」

「ああ、確か『メイドと巫女さんのどちらが萌えるのか』という話をしていたら、ヒートアップしちゃってああなっちゃったんだよね。」

「そんな馬鹿な理由で？」

「え？僕はどうでもいい方だったから、双方の意見を聴いてたんだけど……結局、乱闘騒ぎに巻き込まれて、注意処分を受けたんだよ。」

「いや、あの後は全員で反省文書きながら意気投合して、親友になったんだよね。」

「ちなみに、今でもそいつらとはたまにあって、遊んだり、『萌え』とは何かについて語って、喧嘩騒ぎになったりするんだよね。最近会ってないけど、みんなどうしてるのかな？と思っていると、

「お前、俺たちが電話した時に必ずと言っていいほど、停学になっちゃった、とか、謹慎中だよー、とか、そんな事ばっかじゃねえか。」

「それはタイミングの問題だよ。僕だって真面目に授業受けていた

りするんだからね。」

「起きてる方が珍しいのに、何を言っているの？」

と喋っていたら榊さんが、

「よく退学になりませんでしたね・・・・・・・・・・。」

と、僕を不思議そうな目で見て言った。

「中学までは義務教育だからね。それに、両親とは連絡がつかないから転校なんてできなかったしね。」

「あ、そうなんですか。」

と僕の答えに納得してくれたみたいだ。その後、僕たちは昔話をしながらそれぞれ風呂に入って行った。

3 - 3 榊さんの秘密

最初に僕がお風呂に入って、次に父さんが入って、その次に母さんが入って、今は波風はかせと月島さんが一緒に入っています。あまり話に加わってなかった理由は、『下手に言くと由香里が私にそのまま話題を振ってくる可能性があったから』らしい。

？振られたら何かまずい話でもしていたのかな？一体、僕がいない間に何の話をしていたんだろ？まあ、それは置いておいて、現在、僕と榊さんと両親だけがここにいるし、訊いてみようかな？そう思い僕は、

「ねえ、父さん、母さん、訊きたいことがあるんだけど。」

「なんだ？」「なにかしら？」

「榊さんの事なんだけど、」

と、僕が榊さんの名前を出したら、

ビクッ！と榊さんが驚いていた。気にせずに僕は、

「榊さんの事なんだけど、父さんたちが呼んだ本当の理由って、彼女が『外れ者』だからでしょ？」

「それは訊きたい事じゃなくて、確認したいことだぞ、泰輝。まあ、そうだと思うから、母さんが連れてきたんだが、」

「それでも、私は喜美恵ちゃんの両親が提案したから連れてきたのよ。そこらへんは分かっているわね？」

「うん。」

「そう。なら、喜美恵ちゃんに言わないとね。……喜美恵ちゃん、こっちに来てくれないかしら？ちょっと話したいことがあるから。」

「は、はい！分かりました！」

と言って、榊さんは僕の隣に座った。そして母さんが、

「喜美恵ちゃん、あなた、もしかすると人の心が解るんじゃないかしら？」

「ど、どうしてそれを!!?」

と、まるで、誰にも話さなかったからばれないかと思っていたような感じの驚きだった。母さん、どうして分かったんだろ?と疑問に思っている、

「だって、お店で働いているとき、まるで相手の気持ち解っているかのような気配りをしていたからよ。それに、時々嫌なお客さんが来たときは、自然とさけているでしょ?」

「!!!?」

母さんが説明したのを聞いた榊さんは、本当に驚いていた。やっぱりそうだったのか。啓太の、あの時の台詞を聞いたときに榊さんが、引いていた理由を、僕なりに考えた結果が『外れ者』だったんだけどね。ようやく落ち着きを取り戻したのか榊さんが、

「確かに私は他の人の心が解ります。そのせいで、私は友達がいまませんでしたので……。それが嫌になった時に両親から、日本に行つて来いと言われました。」

と肯定した後、なんだか暗い雰囲気になって身の上話が始まった。

「その時の私は、両親と離れるのがとても嫌でした。そうしたら両親が、『風間つてよくうちの店に来る客いるだろ?そいつの息子が十年も会つてないのに一人で頑張つて暮らしているんだとよ。そいつに会えば、お前も変わるんじゃないか?』と言ったのです。私は、その子はどうやって、両親と離ればなれの状態で生きていたのか、と思いました。そして、初めてその人の心を知りたいと思いました。」

「そうなの。」「ふん。」

と相槌を打つ両親。その話を聴いていると、もしかすると僕の事なのかな?と思うけど、僕は口に出さなかった。そのまま榊さんが、

「そして、今日、私は両親と別れてここに来ました。本当は、新蔵様と由香里様と一緒にはずでしたが、乗り遅れてしまい、次の便に乗せてもらいました……。ここに来るまでに、写真撮影だとかあったのですが、あれはなんだったのでしょうか?」

と不思議に思っている榊さん。

それはあなたがメイド服で歩いているからですよ！と突っ込みをしたいのを我慢して、

「珍しかったからじゃない？きつと。」

その答えに納得したのか、榊さんが話を続けた。

「ここに来るまで、私はその息子さん、あ、泰輝さんですね。泰輝さんはどんな人なのか想像していました。その時想像したのが、とても怖い人なのかな、でした。」

あ、僕はそんな想像されていたんだ。

・・・ちよつとシヨックだなあ、と思っていると、榊さんが、

「でも、実際の泰輝さんの印象は、とても優しい方でした。・・・最初は警察を呼ばれましたけど。」

「それはごめんね。だって、僕みたいな所に君みたいな綺麗な人が来るなんてことは無いと思ってたから。」

と、僕が言ったら、

「ふえ！！き、綺麗ですか！！私！？」

と榊さんが僕に顔を近づけながら訊いてきた。榊さん！か、顔、顔が近いです！本当に！と顔が非常に近くてドキドキしながら、

「ほ、本当だよ！自信持っていよいよ！！」

と言った。それを見ていた両親が、

「この光景を見てみると、昔を思い出すわね。」

「ん？昔つて、なんだっけ？」

「憶えていないの？あなたが、私と付き合っていたところに、他の女性と言葉だけで仲良くなっていたじゃない。」

「ソ、ソウデシタツケ？」

「あの時、よく私達別れなかったわね。」

「そ、そうだな。・・・いやあ、泰輝の奴も青春してるなあ。なあ、母さん？」

「うまく話題を変えたわね？・・・まあ、そうね。泰輝も、これからいろいろと苦労するでしょうね。主に女性絡みで。」

「モテる、と言っているのかな？」

「そうね。」

等と話していた。ちょっと、そこのお二人さん！！僕にとって不吉な予感しかないよ、その会話！？なんて心の中で突っ込んでいた
ら榊さんが、

「わ、私・・・・・・・・男の人に真顔で言われたのは、は、初めてです
ので・・・・・・・・」

と、顔が赤くなりながら、小さな声でそういった。

・・・・・・・・あの、どうでもいいですけど、手、放してくれませんか？
と、言おうとしたら、

「いいお湯だったわね。」

「・・・・・・・・うう。風呂は一人で入った方がいい。違いを見せつ
けられる。」

「ふふん。こればかりは、どうしようもないんじゃないかしら？」

「そんなことはない！！いずれ抜いてやる！」

「ふん、望むところよ。・・・・・・・・あ。」

「どうした？・・・・・・・・あ。」

「あ。」

と風呂上がりの波風はかせと月島さんがリビングに来た。それはいいんだ
けど・・・・・・・・僕の状況について説明しよう。

？ 僕と榊さんは、手を握り合っている。

？ 榊さんは、顔が赤くなっている。

？ 両親は、テレビを見ている。

・・・・・・・・どうしよう、この状況。

3 - 4 就寝

なんか、何を言っても、聞き入れてもらえなさそうな気がする。そう思っていたら、

「泰輝？これはどういう事？」

「説明してもらいたいのだが。」

と、本当に怒り心頭な二人が訊いてきた。そのせいで、榊さんが怖がって、手を離してくれた。今更遅い気がするんだけど、どこから説明しようか？と思いながら、僕は両親に、

「（二人とも、説明してよ。じゃないと僕、明日生きているか自信がないよ。）」

「（そうは言ってもなあ・・・。）」

「（しょうがないわね。嘘をちよつと混ぜながら、説明しましょうか。）」

「（ありがとう、母さん！）」

と、三人でアイコンタクトをしていた。よし！何とか生き延びるチャンスを確保できた！あとは、母さんが上手く説明してくれることを祈るのみ！なんて思っていたら、

「私が説明するわ。」

「由香里さんが？どうしてです？」

「それはね、私たちが、二人といろいろと話していたからよ。」

「何の話だ？」

「そうね・・・ちよつと二人ともこっちに来てくれる？」

「？まあ、いいですけど・・・」

「？まあ、わかったが・・・」

「いい？例えば・・・が・・・することについてとか、」

「！！？な、な、なんてことを話していたんですか！！！」

「そ、そ、そうだ！！！そ、そ、それは早いだろ！！？」

「そうかしら？二人とも、もうすぐ大人になるのだから、それくら

「い知ってても、問題ないんじゃないかしら？」

「母さん、二人にどんな嘘を吹き込んだの？二人とも、顔真っ赤だよ？そして、榊さんはどうやら、波風はかせの気持ちを読んだみたいで、『は、はわわわわ！』と顔を赤くしながら、あたふたしていた。」

「……母さんは何を言ったの？と訊くのは野暮だから、そのまま放つて置いて寝よう。そう思い僕は、

「おやすみ。」

と言つて、自分の部屋に行った。

「……明日から、また大変なことになりそうだ、と思いながら。」

泰輝が自分の部屋に行った後、波風はかせたちは何とか落ち着いた。そして、泰輝がいないことに気付いた。

「あれ？泰輝は？」

「ん？ああ、あいつなら自分の部屋に行つたぜ。もう寝るんじゃないのか？」

「早いわね、あの子は。……榊ちゃんはお風呂入りなさい。」

「は、はい。分かりました。」

と言つて、榊はお風呂に向かった。残された二人は、どこで寝るのかと訊くと、使っていない部屋があるから二人で寝てね、と由香里が言った。

その言葉に従い、二人は二階にある、使っていない部屋に向かった。その時、

「そついえば、泰輝の部屋はどうなっているのだ？」

「私も入ったことはないわね。今度、入れてもらおうかしら。」

「抜け駆けとはいいい度胸だな。」

「あら。そんなんじゃないわよ。でも、折角だから、あなたがいないときにお願ひしようかしら。」

「……本当にム力つく奴だな。」

「それはどうも。」

「フン!!」「フン!!」

という会話をしていた。

その頃、リビングでは喜美恵が風呂に入っているの、新蔵と由香里の二人だけがいた。

「なあ、母さん。」

「なにかしら?」

「泰輝の奴、久し振りに見たけど、大きくなったよな。」

「そうね。」

「喜美恵ちゃんを特別クラスじゃなくて、普通のクラス、しかも泰輝と同じクラスに入れたのは何か理由があるのか?」

「大した理由はないわ。あの子を頼まれている以上、楽しい思い出を作らせたいと思うでしょ?」

「そうだな……。ところで、泰輝に外れ者の力が効かない理由って、泰輝の『あれ』だってことを、何故言わせてくれなかった?」

「何故って……。『あれ』がなんなのか分からないのに、口に出す必要はある?」

「……。そうだな。母さん、母さんの対応はいつもすごいな。」

「あら、褒めても、昔の事は流しませんよ。」

「……。そうですか。」

と片方は楽しそうに、片方は落ち込んだ状態で会話をしていた。まるで、子供の頃から一緒にいたように。変わらぬ感じで。

「お風呂、ありがとうございます。いいお湯でした。」

「そう。それはよかった。」

「そうだな。」

と、喜美恵が風呂から上がって、リビングに来た時、二人は普通の雰囲気に戻って話をした。

「あの、新蔵様、由香里様。これからしばらくの間、よろしく願います。」

「そんな畏まらなくていいのよ。」

「そうだぜ。今、ここにいる間は俺たちの事を、『家族』だと思ってくれて構わないぜ。」

「……ハイ!!!」

と、新蔵と由香里の言葉を受けて喜美恵は、笑顔で答えた。

（幕間）

「ただいまあ。」

「応。遅かったな、啓太。どこ行ってたんだ？」

「そうそう、どこに行ってたの？心配したんだから。」

「ああ。帰り道に泰輝の家によつてきたんだよ。」

「泰輝って、停学処分受けたやつだろ？入学早々。……昔の啓太を思い出すなあ。」

「あら、停学にはなつたことはないでしょ？……注意を受けたことなら、何度かあるけど。」

「そうだったな。」

「昔話もほどほどにしてくれ。……それでさ、あいつの両親が家に戻ってきている、っていうからさ、どんな人だか確かめるために残っていたんだよ。」

「そうか。で、どんな人達だったんだ？」

「それがさ、一度会ってみればわかるけど、片方の外見がとんでもないことになってた。」

「ふん。ところで、昔の話をするが、お前はこれでいいのか？」

「……ああ。俺はこのままここで暮らす。」

「そうか。俺達も正直居づらかったから、別にいいんだが・・・」

「ありがとよ。」

と、そんな会話がその日に、啓太の家ではされていた。

第四話 新たな人たち

時刻は午前五時半。泰輝は、目覚ましのアラームで目が覚めた。

「……………ふわあ、よく寝た。そういえば……………今日は、登校する日だっけ。」

と呟きながら、起きることにした。…………あれ？何か忘れてるような気がするな……なんだろう？

……………。

まあ、思い出せないのならいいや。大した事じゃないだろうから。そう思い、僕はいつも通りに、顔を洗いに行った。

洗面台に着いて、僕はいつも通りに顔を洗っていた。あ、さっぱりする。習慣となっているから、これをやらないと起きてる、って感じがしないんだよね。終わった後、僕は唐突に気付いた。お風呂場に誰かがいることに。

寝ぼけていたから、なんて言い訳する気じゃないけど、起きた時って、基本的に頭が働かないよね。そして、これもまた唐突に思い出した。

そういえば昨日、両親が帰ってきて、榊さんが家に来て、波風と月島さんが家に泊まりに来たことを…………よし。このままキッチンに行つて、朝食でも作ろう。そう思い、出て行こうとしたら、「いや、さっぱりした。…………お、泰輝。お前いつもこんな時間

間に起きてるのか？」

「って、父さんだったの！！」

なんとお風呂場にいたのは、父さんだった。…………ちよつとガツカリなんだけど。でも、これが波風^{はかせ}たちだったら、大変だったから良かったと言えば、良かったのかな。気持ち

を切り替えて、父さんに訊いた。

「どうしてこんな時間にお風呂にいたの？」

「ああ。それは、いつも起きた時は冷たいシャワーを浴びていたから、習慣になったのかもな。」

「そう。なら、折角だから手伝ってよ。洗濯物に、朝食作りに、弁当作り。」

「……………もう一回寝ようかな。」

「父さん？」

「嘘だつて。その声まじで怖いから、止めてくれないか？」

「そんなに怖い？」

「ああ。殺されるんじゃないかと錯覚するくらいにはな。」

「あ、そう。まあ、そんなことは良いから、父さんは洗濯物よろしくね。僕は、料理を作るから。」

「わかった。……………しかし、十年離れてたのに、普通に会話できるなんてすごいな。」

「そう？僕は、たまに電話や手紙が来るからそんなことないと思ってるけど。」

「そういうもんか？」

「そういうものじゃない？」

と親子で会話をしながら、それぞれの役割をしにいった。

……………あ。弁当、いくつ作ればいいんだろ？そう思ったけど分からないので、とりあえず朝食を作ることにした。

4 - 2 解禁

「おはようございます。泰輝さん。」

「あ、おはよう。榊さん。よく眠れた？」

「はい！！おかげさまでぐっすりと寝れました！……ところで、朝食ですか？」

「いや、朝食はもう出来たから、弁当作っているんだけど……何人分作ればいいのか分かんなくて。一応、僕と榊さんの分は作っているけど……。」

「な、なにかお手伝いできることはないでしょうか？」

「うーん、それじゃあ、」

「おい、泰輝。洗濯が終わったんだが。」

「じゃあ、榊さんは父さんと洗濯物干してきて。」

「わかりました。新蔵様、手伝います。」

「応。」

と言って、父さんと榊さんは庭に洗濯物を干しに行った。

……さつさと波風はかぜや月島さん、起きないかなあ。

「おはよう。泰輝。」

「おはよう……zzz。」

「僕としては、早く起きて欲しいんだけど、二人とも。おかげで、弁当作るかどうか悩んで、作ってないよ。」

「ええ！でも両親が作ってくれるから……。」

「あら？たしか、『泰輝君に作ってもらえるから作らなくていい。』って家に行ったときに言ってたような……。」

「……え？どうしよう。」

「ははは。まあ、とりあえず作っとくから、先に朝食食べていて。月島さんは？」

「……………ああ！作ってほしい！ぜひとも！」

「ふふふ。嬉しそうね、カリアちゃん。」

「うむ！！好きな人から作ってもらうのは誰でも嬉しいだろ？」

「そうね。」「そうね。」

「三人とも、話していないでさっさと食べてよ。」

「泰輝は？」

「弁当作ってから、食べるよ。」

「さて、食べるか、喜美恵ちゃん。」

「あ、泰輝さんのお手伝いしてきますね。」

「いや、さっさと食べていいよ。父さんと母さんに洗ってもらうから。」

「わかったよ。」「わかってるわ。」

と言つて、両親は朝食を食べ始めた。それに^{はかせ}つられて、波風達も食べ始めた。今は、七時ぐらいか。なら、別に問題ないな。

自分が普段登校する時間を頭に思い浮かべながら、二人分の弁当を作つていった。

「ごちそうさまでした。……………泰輝さんはお料理が本当にお上手ですね。」

「そつといわれると、てれるなあ。」

「……………相変わらず、上手いわね。面白くない位に。」

「（モグモグ、ゴクン）波風^{はかせ}、褒めていないよね？」

「それより泰輝、弁当ありがとうな。」

「（ゴクン）そう言ってもらえると、作った買いがあるよ。」

「理江ちゃん、素直に『ありがとう』って言えばいいのに。」

「……………ありがとう、泰輝。」

「どういたしまして。」

と波風^{はかせ}に、久し振りに褒められたので、笑ったら、

「……………卑怯よ、その笑顔。」

「……波風はかせの奴、ずるい。」

「泰輝さんの笑顔は素敵すてきですね。」

と女子三人の声。波風はかせは赤くなりながら、月島さんは頬を膨らませながら、榊さんはちよつと赤くなりながら言っていた。

え？ 僕笑っただけなのに、どうしてこんなに様々な反応が得られるの？

……解けなさそうだから考えるのをやめて、僕は朝食を食べ続けた。

時刻は八時になったところ。僕達は学校に行く準備を終えて、いざ行こう！ となったところで、

「おい、みんな行こうぜ。」

と、啓太の声が玄関越しに聞こえた。その声で母さんが、

「いつてらっしゃい、みんな。」

と言つて、僕たちを見送った。いつてきます、二人とも。そう思い、僕は学校に行った。でも、僕は謹慎中だったからなじめるかな？ という疑問を持ったから二人に訊いてみたんだけど、

「それは大丈夫なんじゃないかしら。」

「そうだな。」

「どうして？」

「だって、泰輝のことを委員長が、『あいつはすごいやつだ。』と褒めていたから、クラスの人達がどんな奴かと想像してるみたいだから。」

「そうだな。俺にも訊いてきた奴もいたな。」

「なんて答えたの？」

「ああ、『あいつといると面白い』と答えたぞ。」

と話しながら登校していると、

「こういうのっていいですね。みんなで仲良くいけるんですから。」と榊さんが言った。そういえば……

「榊さんって、一人で学校に？」

「はい。仲良く登校するのをみてて、楽しそうだなと思いました。」
これを聞いた僕は、健気だなあと不意に思った。と同時に、両親が昨日言っていたことについて思い出した。

『泰輝。校長には話が通ってるけど、なるべく喜美恵ちゃんのことばれないでね？』

『分かってるよ。榊さんにつらい思いなんてさせたくないんでしょ？』

『それもそうだけどよ、あゝ、あれだ。榊が特別扱いされないようにして欲しいんだ。』

『でも、特別クラスの人達にはばれちゃうでしょ？月島さんも気付いてそうだけど。』

『そうなったら、何とかしてくれ。』

『頑張ってね、泰輝。』

『思いつきり人任せじゃん！』

とまあ、正直僕だけで何とかするという、難易度が高い要求をされたわけだけど、両親が頼んできたからやるしかないでしょ。そう考えながら歩いていると、

「泰輝。ちよつといいか。」

「ん？何？月島さん。」

月島さんが、僕のことを見上げて小声でこう訊いてきた。

「榊の奴だが、もしかして、私達と同じ外れ者ではないか？」

「え？どうしてそう思うの？」

「それはな、私たちと同じ『感じ』がするからだ。」

「感じ？それって、雰囲気ってこと？」

「まあ、そんな感じだ。私達は、それでなんとなく分かるのだ。」

「そう。……でも、このことは内緒にしといてね？」

「なぜ？」

「榊さんに楽しい思い出をつくらせたいという両親の願いだからだよ。」

「……そうか。それなら、私も協力しよう。」

「ありがとう。」

「……………（コクリ）」

と僕がお礼を言ったら、月島さんは顔を赤くしながら頷いた。

ん？波風はかせの時もそうだけど、僕が笑いながらお礼を言つとなんで顔が赤くなるの？

……………謎だ。そうこうしているうちに、

「ここが朝露高校ですか。大きいですね。」

「だろ？」

「久し振りに学校に来たよ。何か変わったことはあるの？」

「特には無いわね。……………ところで、カリアと何を話していたのかしら？」

「……………なんで月島さんのこと、名前で呼んでいるの？」

「私達はライバルだから名前で呼ぶことにしたのだ。なあ、理江？」

「そうね。」

ここで、なんの？って、訊くのはおそらく、地雷だろう。そんなことを思いながら、僕達は校門を通り過ぎて行った。

4 - 3 校長との話し合い

その後、月島さんは別館に行き、僕たちは新館に向かった。そして僕は謹慎終了の報告に、榊さんは編入してきたため、職員室に向かった。

『失礼します。』

と、二人で職員室に行ったんだけど・・・やっぱり、僕に対する怒りが一部の先生たちからヒシヒシと感じられる。しばらくは大人しくしよう、そう決意して僕は、クラスの担任の席に行った。

「先生。おはようございます。昨日で謹慎が終わって、ようやくって感じがします。」

「そうか。なら、もうこんな事するんじゃないぞ。」

「それに関しては何とも・・・。」

「おい。今度こそ退学だろ？それでもいいのか？」

「別にいいですよ。」

「はあ、堂々とそんなこと言っなよ。俺たちの前で。・・・で、君が榊喜美恵さんだね？」

「は、はい！」

「そう緊張するものじゃないよ。こいつを除けば割といいクラスだから気楽にしてくれ。」

「わ、わかりました。」

「さて、そろそろホームルームの時間だな。風間、さっさと教室に向かえ・・・。」と言いたところだが、

「?どうしたんですか？」

「校長が呼びだ。ホームルームではちゃんと出席扱いしてやるから、行って来い。」

「あ、分かりました。じゃ、それでは失礼しました。」

「さてと、じゃ、行こうか榊さん。」

「は、はい！」

「いい返事だ。」

と言って、担任と榊は職員室を出た。

「失礼します。．．．何かご用ですか？校長先生。」

と、泰輝は校長室に入って行った。

「おはよう、風間君。やっと謹慎が終わったか。私としては、謹慎はいらないと思っていたんだが。」

「それは、即刻退学ということですか？」

「いやいや、そういうことではない。今回の件のお咎めはなしにしようと考えていた。」

「．．．．．それは、先生たちが聴いたら大変な抗議が起きますよ。」

「そうだ。だから君を、一ヶ月間も停学にしたのだ。」

「そういえば、警備システム、少しイジりましたね？大きく変えたのではなく、ちょっとずつ、気付かれないように。」

「流石だな。よく見破った。」

「まあ、謹慎中は暇でしたから。」

「さて、そろそろ本題に移ろうか。」

「その前に、ひとついいですか？」

「なにかね？」

「どうして僕をお咎めなしにしようとしたんですか？」

まるで、タヌキが化かし合いをしているかのような会話。本題に移ろうとする校長に、罰を免除にしようとした校長の真意を量ろうとする泰輝。

「お咎めなしにしたかった理由？それは薄々、自分でも気付いているんじゃないか？」

「僕としては、説明して欲しいんですけど。」

それに耐えられなくなったのか、はたまた、本題に早く移りたいの

か校長が、

「仕方ない。こうしていると、いつまで経っても進まないからな。」

「ありがとうございます。」

「君をお咎めなしにしたかった理由。それはまず、外れ者の教師たちの性格を調べられたからだ。これは、特別クラスの生徒達が暴走した時に必要だったからな、いつもなら性格判断のテストをするのだが、君のおかげでそれをやらなくて済んだ。二つ目は、君が警備システムをやってくれたおかげで、これの弱点とかを発見できた。それを考慮して、警備システムをちよつと変えたのだが……早速ばれてしまったな。それで最後だが、」

「まだあつたんですか……。」

理由として挙げるなら先の話で十分のはずなのに、もうひとつあるのか。と泰輝は面倒くさくなり、校長は、

「君が理由を訊いてきたのだろ。我慢して聴け。……最後の理由は、君に或ることを協力してもらいたいと思つたからだ。」

「そうですか。停学を受けて命拾ひしたってことですね、僕は。」

最後の理由を聴いた泰輝は、処分を受けて安心していたのだが、

「何を言っている？本題はそのことについてなんだが。」

と、校長のその一言で泰輝は、あからさまに嫌な顔をした。

「それで、本題なんだが……。」

「お断りします。」

「内容も言つてないのに、それは酷いのではないのかね？」

本題の内容を話そうとしたところで、泰輝が即答したので、校長は話を聴くだけでもいいのでは？と提案した。それに対し、

「その内容って、どうせ『特別クラスに入って、他の生徒たちの力に対してはどうか確かめろ。』とか、『それが嫌なら、ちよくちよく襲撃させるぞ。』とか、そういういたものを何かでやらせようってことでしょ？」

「……まあ、その通りだが。君は断れるわけではないだろう？ 榊君の件があるのだから。」

「残念ながら、断れますね。」

「ほう。その根拠は？」

「それは、僕が貴方達の秘密を知っているというのかもしれませんが、両親が今うちにいますし、貴方達の事を知っていますから。」

「そうだったな。君の両親は、この学校の特別クラスで講師をやってもらっていたな。これは……参ったな。こちらには、君を拘束するカードがもうない。またしても私達の負け、か。」

「勝ち負けはともかく、僕はもう教室に戻っていいですか？」

「構わないが……ひとつ忠告しておこう。」

自分には強制できるものがない、と校長が負けを認めた。それに対して泰輝は、勝負など関係ないからさっさと戻ろうとしていたら、校長が忠告を言うと言ってきたので、不審に思いながらも、校長の『忠告』に耳を傾けた。

「忠告とは？」

「協力など関係なくても、君は特別クラスの人に興味を持たれている。頑張ってくれ。それと、」

「まだあるんですか？」

「今後、今回のような騒動を、あと十回以上起こした場合、君に一年間の停学を言い渡そうと思う。」

「僕としては、退学でいいですよ？」

「他の先生達もそう言うだろうが、月島君が君が退学したと聞いたら、何をしてくすか分からないから、残ってもらいたいのだよ。」

「一年も停学なんて、地獄以外の何物でもないですよ！」

「停学の間は自分でやりたいことをやればいいのでは？」

「……！そうですね！！では、失礼しました！！」

「あつ。……しまった。まあ、いいか。あと、矢島君がちょっかいをかけてくるだろうから、無視しても構わないというのを忘れていた。」

走り去る泰輝をみながら、校長は呟いた。

4 - 4 久し振りの教室

一時間目が始まる少し前に、

「危なかった。一校時目で遅刻とか、やっちゃ駄目だよな。．．．
ったく、校長の話つてのはどうしていつも長いのかなあ。」

と、ぼやきながら教室に泰輝が入ってきた。

「．．．．．．．．．．．．．．．．」

「やあ！！みんな久し振り！！」

「．．．．．．．．．．．．．．．．」

「あれ？なんでみんな黙っているの？」

「．．．．．．．．泰輝。」

「あ！啓太！僕の席どこだっけ？」

「お前、自分のこと言わないとほとんどの人分からねえだろ！！！」

「え？そうなの？」

「素で返すんじゃねええええ！！」

と僕と啓太のやりとりを聴いた他のみんなが、

『こいつが風間泰輝か。』

と思ったのは、言うまでもないよね。

「で？僕の席つてどこだっけ？」

「俺のツツコミはスルーか。．．．ほら、そこだ。」

「ありがとね。」

と僕は啓太にお礼を言つて、自分の席に向かった。席に着いたら、
波風と榊さんがこちらに来て、こう訊いた。

「泰輝、校長とどんな話をしていたの？」

「．．．．さて、これになんて答えようか？」

- 1、素直に全部答える。
- 2、ある程度嘘を混ぜて話す。
- 3、言葉を濁す。

4、話題を逸らす。

一は、波風^{はかせ}が心配するから却下。二は、嘘だとばれたら殴られるから却下。となると・・・

・・・三と四のどちらか、か・・・よし。これなら大丈夫か。そう考えて僕は、

「ははは。特に話なんてしてないよ。」

「じゃあ、なんでこんなに遅くなったのよ？」

「いや、説教受けていて・・・ね？」

「怪しいけど・・・いいわ。これ以上追及はしないであげる。」と話を逸らすことにした。それ以上は、波風^{はかせ}は追及してこなかった。

・・・ごめんね、波風^{はかせ}。そう心の中で謝りながら僕は、

「榊さん、どう？」

と訊いたら、

「はい！皆さん、とても優しく接してくれますから、別に問題ありません！」

「もう友達できたの？」

「はい。これも新蔵様と由香里様のおかげです！」

と、嬉しそうに語る榊さん。本当に楽しいんだな、ここは。と思っていると、

「やっと来たのか、風間。」

「あ、委員長。おはよう。」

委員長が声をかけてきた。会う度にいつも思うんだけど、なんで仏頂面なんだろう？美人と呼ばれてもおかしくはないのに。と考えていると、

「もうすぐテストだからな。謹慎していたから、というのは言い訳にはならないからな。それと、榊も編入してきたばかりだろうが、頑張ってくれ。」

と言ってきた。え？テスト？そんなこと聴いてないよ？と波風^{はかせ}のほうを向いたら、

「あ、ごめんね。すっかり忘れていたわ。」
と返してきた。返ってきた言葉を受けて、そりゃないよ波風^{はかせ}。と呟
こうとしたら、一校時目の始業のベルが鳴った。その途端に、みん
なは自分の席に着いた。

この光景を見ると、本当に学校に来てるんだと実感できるんだよね。
そんなことを思っていたら、先生が来て授業が始まった。

4 - 5 変わったこと

「ふう、やっとお昼だあ。久し振りだから疲れたよ。」

「なに言ってるのよ、泰輝。あんた、ほとんど寝てたじゃない。・
・あ、こに使わせ

てもらおう。」

「え？ちゃんと僕、起きてたよ？自分が指された時はね。それは別にいいと思うけど、僕と一緒に食べなくてもいいんじゃない？」

「分かってねえな、泰輝。・・・お、その唐揚げおいしそうだな交換してくれ。」

「じゃあ、そっちの大学イモとならいいよ。それで、分かっている、ってどういうことなの？」

「いいぜ。・・・そりゃあ、お前、波風はかせの」

「殴るわよ。それ以上言ったら。」

「すみませんでした。」

「？結局、なんだったの？」

「気にしなくてもいいわよ。」

「あ、そう。でも、榊さんはもう友達と一緒にお昼食べてるよ。」

「それはよかったな。」

「うん。だから波風はかせも・・・って、ええ！月島さん！？どうしてここに！？」

「ちよつとカリアー！！どうしてあなたがここにいるのよ！？」

「別にいいではないか。ここでは『力』など使わないからな。そ、それに、泰輝の様子が知リたかつたからな・・・・・。」

「また最後の方が聞き取れなかつたな。まあ、別にいいよね。そう思つて、このまま四人でお昼を食べていたら、

ドヴァアン！！とドアが乱暴に開いた。

その先にいたのは、

「おい風間！！俺と勝負しろ！！」

と大声で叫ぶ矢島君だった。

「……あらら、みんな静まりかえっちゃったよ。と全体的に眺めながら、

「この大学イモ、おいしいね。」

「この唐揚げだっておいしいな。これ、泰輝が作ったのか？」

「うん。弁当なんて久しぶりに作ったけど、飯は自分でほぼ毎日作っていたからね。」

「なるほどな。……ところで、波風や月島や榊の弁当を作ったのも、お前か？」

「そうだけど。それが？」

「いや……。どつりで、波風や月島は悔しそうな顔をして食べているし、榊と食べている奴らがお前の顔を見ながら驚いている訳だ。」

「へ？」

と、無視して食事が続けていた。そしたら、

「無視するんじゃないええええ！！」

と怒鳴って、僕の席に近づいてきた。もう折角お昼食べているんだからさ、静かにしてくれないかな？と思いつながら、なおも食べ続ける僕。

そのことに怒ったのか、それとも月島さんがここにいるせいなのか、矢島君が、

「てめえ、勝負しやがってくれやー！！」

と、口調が壊れた。えーと、

「大丈夫？」

「うるせー！いいから勝負しろやー！！」

と、何か勝負しないと戻ってくれない様子。周りを見ると『何とかしろ』的な視線が集中する。……はあ、しょうがないなあ。

「いいよ。勝負しよう。その代わり、勝負方法は僕が決めるけど、いい？」

「いいぜ！！今度こそテメエに勝ってやるからな！！」

とあっさり乗ってくれた矢島君。……可哀相だけど、事を大きくしたくないからこれで勘弁してね。と、心の中で謝りながら僕は、

「それで、勝負の方法なんだけど、どちらがはやく、職員室に行けるかにしようか。」

「それなら勝負にならないような気がするが……いいぜ。受けて立つ。」

「そう。なら、ここから始めるよ。位置について、ヨイ、ドン！」

「ははは！俺の勝ちだ！！風間！！」
と言って、勢いよく教室を飛び出した矢島君。本当にごめんね。と、心の中で再度謝りながら僕は、自分の席について、再びお昼ご飯を食べた。その光景を見た啓太が、

「おい！勝負するんじゃないかったのかよ！？」

と、怒鳴ってきた。でもそんなことすると、

「こらあ！！！！矢島、貴様何やってるんだあ！！」

「な！？これは風間との勝負なんだよ！！」

「嘘をつくなあ！！風間はどこにもいないだろ！」

「なに！？……うお、マジでいねえ。」

「とりあえず、職員室に来てもらおうか。さいわい、職員室の前まで来てくれたから、手間が省かれたが……『力』を使つたな。しかも、ここで。」

「うつ！！だけどこれは、風間との勝負の最中であって……」

「言い訳はここで聴こう。」

「チクショー！！風間、憶えてやがれ！」

僕も一緒に捕まるから、放って置いたんだよね。この声が聴こえたのか、啓太は黙り、他の人たちも、静かになった。それでも、

「全く、ゴール地点をちゃんと聴いていなかったのかしら？職員室まで競走しようと提案された時に気付かなかったあいつが悪いわね。」

「しかし、泰輝はすごいな。あえて提案した方が不利になるような勝負内容にして、深く考えさせないようにして、相手をはめるなんて。感心するぞ。さすがだな。」

と二人はフォローを入れてくれた。でも嬉しいね、フォローが入るなんてさ。

そう思いながら、

「二人とも、僕は嬉しいよ。ありがとね。」

と、笑いながら言った。するとやっぱり、二人とも顔が赤くなりながら、

「い、いいわよ。別に。」「そ、そうだ。」

と言った。その光景を見た人達は、三人の状況を瞬時に把握し、黙って見守るという行動を選択した。啓太はというと、

「泰輝。お前、本当に鬼だな。いや、鬼畜だな。」

と言っていた。やだなあ、僕は鬼でも鬼畜でもないって。ただ、騒ぎにならないように相手しているだけじゃない。中学でもたまにこういう事あったから、あしらう位なら簡単だよ。

そうこうしているうちに、昼休みが終わりそうになっているんだけど……。

「月島さんって、どういう授業してるの？」

「ん？どうって、泰輝達と同じ授業も受けるぞ。ただ、外れ者はどのようにしてこの世界で生きていくか、というものも教えられる。」

「大変だね。」

「そうでもない。この方がむしろ楽だ。それに、」

「それに？」

「泰輝がいるならどこでも楽しく感じるからな………本当に。」

「僕がなんだって？」

「べ、別に何でもないぞ！！」

と、いきなり月島さんが顔を背けて言った。本当に、女子の気持ちって謎だよな。

4 - 6 どちらさま？

昼休みが終わりそうになったので、月島さんは別館に戻って行つた。往復すなんて、結構大変だろうに。さてと、僕も次の授業に遅れないようにしよう、そう考えながら準備をしていたら、

「風間。ちよつと来い。」

と先生が僕を呼んだ。何かしたつけ？と、疑問に思いながら、僕は教室を出た。

「何か用ですか？」

「さっきの事なんだが、」

「え？さっきの事って？」

「矢島が、お前にはめられたと言っているのだが、そここのところどうなんだ？」

「え？あゝ、あれはですね、あつちが勝負しろ、って言ってきたものですから……。」

「なるほど。それならお前に非は無いな。すまん、時間を取らせて。」

「いいえ、別に構いませんよ。僕も色々やっただからです。」

「それじゃあな。」

と言つて、先生は戻つていった。……結構優しんだな、あの先生。そう思いながら僕は、準備をしに教室に戻つていった。

その後、何事もなく授業は終わつて、放課後になった。僕は、帰る準備をしてこのまま帰ろうとしたら、

ピンポンパンポン

と鳴つて、放送が聴こえた。

「1-Aの風間泰輝君。至急、校長室へ来てください。繰り返しま

す。1―Aの風間泰輝君。至急、校長室に来てください。」

それを聞いた時に思ったのが、僕、今日騒ぎなんて起こしてないのに、どうして？なんだけど……もしかして、昼休みの事を『騒ぎ』としてカウントされたのかな？

それだったら理不尽だなと思いながら校長室に行こうとしたら、
「泰輝。お前また何かやったのか？」「今日は特に何もやってないわよね。」

と心配したのか、波風はかせと啓太が僕のところに来た。

心配してくれるのは嬉しいけどさ………

「啓太、僕は今日、特に騒ぎらしいことをやっていなかったでしょう？そう毎日毎日やらないよ、いくらなんでもね。」

「そうか。そりゃ、悪かったな。………となると、どうしてお前が呼ばれたんだ？」

「知らないけど………、行ってみたら分かるんじゃない？つていう事で、行ってくるね！」

「あ！待てよ、泰輝！………俺も行くつて！」

「私も行くわ！」

「何が起こっているのか分かりませんが………、みなさん待つてください！」

僕が校長室に一人で行こうとしたら、後ろから慌てて啓太と波風はかせが、その後ろから事情を理解していない榊さんがついてきた。

それにしても、と僕は思った。僕にいったい何の用だろう？普通、校長先生が呼ぶときには放送じゃなくて、他の先生方で僕の事を呼ぶのに。そんなことを考えながら校長室に向かっていると、

「追いついたぜ、泰輝。」

「私たちの事、置いて行かないで欲しいんだけど。」

「あ、あの。何かあったんですか？」

と、追いついてきた三人が言ってきた。あのね？みんな………

「僕だけ呼ばれているのに、ついてくる必要ないんじゃないの？」

と言つと、啓太が言った。

「だつてお前、呼ばれるってことは何かやつたってことだろ？友達としては気になるからな。それに、お前が何かに巻き込まれているんだつたら、そんな面し……いや、心配になるだろ？」

「絶、ッ対に面白がつているよね、啓太？」

「……ごめん。だからその声止めてくれ。榊が怯えている。」

「あ、ごめんね。榊さん。」

「い、いえ、大丈夫です。……泰輝さんって、あんな声出せたんですね。」

「久し振りだわ、泰輝があんな声出すのは。」

「で、啓太は分かったけど、他の二人は？」

と言つと、

「私は心配になったのよ。だつて、あの時だつて何も言わなかったじゃない。」

「……だから今回も、何も言わないで一人でやろうとしているんじゃないかと思ったのよ。」

そう波風はかせが言つと、

「あ……そんなことがあつたんですか。これは……確かに心配になりますね……」

「……」

と、波風はかせの気持ちを読んだのか、榊さんが悲しそうに言った。

「……あの時つて、どの時はかせだろ？でも、波風はかせがそんなことを思っていたことを知つて僕は、波風はかせはこんなに心配してくれていたんだと思うのと同時に、これ以上は心配をかけられないなとも思った。そのためにはどうすればいいのか、と考えこんでいたら、

「……き！泰輝！！ちよつと泰輝！！ついたわよ！！」

「……え！！あ、本当だ。着いてる。言つてくれてありがとね、波風はかせ。」

波風^{はかぜ}に言われて、僕が校長室の前に来ていたことを知った。

「大丈夫か？さっきから何も言わないで歩いていたら心配になったんだが。」

「そうです。私達は何を言っても反応してくれなかったじゃないですか。」

「え？三人ともごめんね。ちょっと考え事してて……」

「またか。……で、どうする？このまま入るのか？」

「そうした方がいいと思うけど……」

「ちよつと待つてよ。何かあるかもしれないから、中の様子でも聴いてみようか。」

『は（え）？』

そんなにおかしいこと、言っただけにとつては常識なんだけど……

「それで？どうやって聞くんだ？」

「え？こつやつて、ドアに耳を当てるだけだけど……」

「と耳を当てると、」

『早く来ないかなあ、月島ちゃんの好きな人。もうそろそろ来てもいいんだけど……』

『は、放せ！！おい！四葉！聴いているのか！！』

『あ、あの美紀ちゃん。そろそろ放してもいいのではないのでしょうか？』

『そうだな。もう逃げないだろ。』

『え……。いいじゃない、別に……。でも、待つている間にいろいろ月島ちゃんの服装変えられたから、いつか。』

「……」

この中に入るには恐らく、とてつもない勇気が必要だと僕は直感した。

そしてそのまま立ち去ろうとすると、

「おい、誰かいたのか？」

「いいや。誰もいなかったみたいだから帰ろうか。」

「本当に？」

「ホント、ホント。じゃ、僕はこれで。」

何とかはぐらかして帰ろうとしたら、

「おや？風間君、さつと中に入らないのかね？彼女達のせいで、仕事^があまり出来ないんだが。」

丁度、校長が僕達の前に現れた。

「……………嫌なタイミングで現れますね、あんたは。」

と、校長のある一言に気付いた波風^{はかせ}が、

「誰もいないんじゃないのかしら？どうして嘘をつくのよ？」

と僕に詰め寄ってきた。しょうがないじゃない。今行ったら、僕は間違いなくさらに大きな騒動に巻き込まれそうだし、ああでも言わないと大人しく帰ろうとしないじゃないか。そんな僕的心情も知らないで、更に波風^{はかせ}が言ってきた。

「大体、あんたはいつもそうじゃない！何にも知らせないで自分だけで解決して、そんなの、馬鹿のやることじゃない！！」

僕は、その一言に力チンときた。

「馬鹿？別にいいよ、そう呼ばれても。自分のやりたいことをやっているんだ、誰に何と言われても気にもかけないし、どんな処罰でも受けるさ。……………そういう波風^{はかせ}はどうなの？自分のやりたいことをやっているの？それに対する覚悟はあるの？」

さすがに反論がくるとは思っていなかったのか、一瞬声が詰まったけど、

「ッ！……………あるわよ！！自分のやりたいことや、その覚悟くらい！！」

と返してきた。

「そう。……………なら、その覚悟でも試させてもらおうかな。」

「な、何をさせるつもりなの？」

「別にたいしたことじゃないよ。そのやりたいことの過程で誰がいなくなるとしても、そのやりたいことを続けることはできる？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

「どう？できるの？できないの？」

「それは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

そしてそのまま、波風^{はかせ}は黙ってしまった。

ちよつと言い過ぎたかな？と思ってしまっけど、この質問に答えられないならもう口出してほしくないな、幼馴染でも。

波風^{はかせ}が黙ってしまったので、他の二人が僕に言ってきた。

「お前、そこまで言うことないんじゃないか？」

「そうですよ。言い過ぎだと思います。波風^{はかせ}さんの気持ちも考えてください！」

そういう君たちは、

「君たちには、やりたいことと、それに対する覚悟はあるの？」

「っ！」

と、啓太は唇を噛み、

「そ、それはありませんが・・・・・・・・・・。」

榊さんは、今は何もやりたいことは無いと言った。ねえ、やっぱり僕って、悪役に向いているのかな？こう見ると、皆に酷いことしか言っていないよね。

などと状況を確認していると、

「ここに居座られると、仕事に支障が出るから、さっさと入ってください。」

そう校長先生が言った。

「僕だけでいいですか？」

「この意気消沈した三人を、どうしろというんだ？」

「僕の両親を呼んできて、こうなった経緯を話してくれればいいですよ。」

「そうか。君がそれならそれでいいんだが・・・・・・・・・・本当に

これでいいのかね？」

校長がそう訊いてきた。

僕は、僕達の会話など聴こえてなさそうな三人を見ちらつと見て、
「・・・・・・・・・・・・・・・・いいですよ、別に。僕としては、その三人が今回は、何も知らない方がいいと思っていますから。」

その声が聴こえたのか波風^{はかせ}が、

「ちょ、なによそれ！？私達には関係ないっていうの！！」
と言ってきた。・・・・・・・・・・やっぱり納得してくれないよね。

うーん、どうしようか？と考えていると、

『何やら外の方が騒がしいな。』

『え？それなら来たんじゃない？』

『そうだと思いますけど・・・・・・・・・・。』

『そういえば、矢島君ってどうしたわけ？』

『風間を呼ぶ、と言ったら帰ったぞ。』

『そういえば、昼休みに『風間に嵌められた！！』って言っていたね。』

『どうでもいいが、放せ！四葉！！』

『いいじゃない別に。風間君が来ているんだから、その恰好を見せなければいいのに。』

『って、お前！ドアを開けようとするな！！その手を離せ！！』
等と言い争っていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・この会話を聴いていると、さっきまでの僕達の会話ってなんだったんだろうね？そう思えて仕方がないね。ということで、

「ごめんね、三人とも。ちょっと我慢できなくて・・・・・・・・。」

早速、僕は三人に謝った。しかも土下座で。これが意外だったのか、
「い、いや、俺も調子に乗りすぎたし・・・・・・・・。」

「あたしもきついこと言ってごめんね。・・・・・・・・でも、

泰輝がさっき言った言葉は痛いところかれたわ。その言葉は胸に刻んでおくわ。」

「そうですね。さっきの泰輝さんは怖かったですが、言っていることは正しいと思いますから。」

と言ってくれた。本当にありがとね、三人とも。こんな友達を持ったことには感謝してもいいと思うよ。

そう思ったら、誰に？と疑問がわいたので、僕は校長室のドアに集中した。

「やっと入ってくれるのか。これでようやく仕事ができそうだな。」
そう校長が言っていたけど、僕はむしろ、今日の仕事はあきらめた方がいいと思うんだけどな。

え？理由？勘だよ、勘。

「で、泰輝。この中には誰がいたの？」

と訊いてきた波風。え〜と、確か・・・・・・・・・・と、僕が言おうとしたら、

ピシャン！！

と、ドアが開いた音がした。それにっられて、僕達はドアの方を見た。そこにいたのは、

「じゃ、じゃ〜ん！！月ちゃんのコスプレどう！？テーマはなんと、『メイド服』！！」

と声を張り上げている人と、

「うう、四葉の馬鹿。開けるなと言ったのに・・・・・・・・・・。」

メイド服を着た月島さんがいた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・何？この状況？

・・・・・・・・・・・・・・・・ふう。さてと、とりあえず落ち着いて・・・・・・・・

「帰ろうか。みんな。」

「そうね。」「そうですね。」「え？帰るのか？俺としてはもうちょい見たいんだが……………」

と言う感じで帰ることにした。まったく、こんな状況を見るために僕たち喧嘩していたのか。何というか、

「さっきの喧嘩が馬鹿らしく思えてきたよ。」

「私も賛成だわ。全く、とんだ無駄足だったわね。」

「そうですね……………ところで、今日の夕飯は何にするおつもりですか？」

「うん。久し振りに煮物でも作ろうかな。」

「おい待てよ！お前ら！！俺をおいてくな！！」

うんうん、やっぱりこの感じがいいよね。仲直りできてよかった、
と思つて帰ろうとしたら、

「ちよつと待つて！！僕達の事は無視！？……………え？ちよつと！？そのまま帰ろうとしないでよ！？お願いだから待つてよ！？」

「泰輝！！この状況について何かツツコむことがあるだろ！？何も言わないで帰ろうとするな！？」

「やれやれ……………」

「私達、どうしてこんなことをしていたのでしょうか？」

と、一人は僕達を立ち止まらせようとし、月島さんは泣きそうになりながら言い、後の二人はなんだか疲れていた。僕のせいじゃないけど。

4・7 特別クラス全員集合（一人除く）！

「それで？僕に何の用？」

場所はそのまま校長室。その後、僕達はしぶしぶ立ち止り、仕方なく校長室に入っていった。その時、月島さんに何故そんな服を着ていたのか、と訊いたら、

『無理矢理着せられた。』

らしい。……僕としては似合っていたし、可愛かったけどな、と言うのはちよつと気が引けるから言わないけどね。

え？なんで、って？それは、榊さんと初めて会った時に、警察に通報したからなんだけど……やっぱり気が引けるよね。

ちなみに僕達は、校長室にある対面式のソファに、波風^{はかせ}、僕、榊さん、啓太の順に、向かい側には、月島さんにメイド服を着せた人……

……四葉さんだっけ？と月島さん、そして榊さんみたいに若干緊張している人と、雰囲気がいかにも武道をやっていますって感じの人が座っている。校長はというと、自分の席で仕事をしようとしているみたいだけど、集中できないみたい。僕達の会話がどんな内容か聴こうとしているみたいだ。素直に仕事をやらなければいいのに。で、冒頭の場面に戻ると、

「えつとお、なんというつか、その……」

「その前に四葉、我々の自己紹介をした方がいいのでは？」

「あ、それもそうだね。僕の名前は四葉美紀。よろしくね、風間君。」

「あ、うん。こちらこそ。」

「私の名前は月影御堂だ。以後お見知りおきを。で、こつちが……」

「わ、私の、な、名前は星涼香と言います。よ、よろしく願います。」

「あ、ご丁寧にどうも。それで、もう一回訊くけど、僕に何か用？」と尋ねたら、啓太が何か思案顔になって、

「星？・・・・・・・・・・ああ！ひよっとすると、星製薬会社の娘さん？」

「確かにそうですけど・・・・・・・・・・どこかでお会いになりましたか？」

「いや、こっちに来る前の知り合いの家に、いろいろな人が来てた話を聴いていてさ、その時に、星製薬会社の話を聴いたんだ。」

「へえ、そうなんだ。いつもあなたの会社を作る薬にはお世話になっているわ。」

「私の会社じゃありません。父の会社です。」

「それはごめんなさい。」

「私がイギリスにいた時にも、星製薬会社の名前は耳にしていたよ。」

「あ、そうなんですか。まあ、確かに海外進出はしましたが、そこまで知られてはいないはずなんです。」

「いいじゃない、別に！スズのお父さんの会社を海外でも通用している証拠じゃない！」

「あ、ありがと、美紀ちゃん。」

「確かに立派だな。」

とそんな会話が展開されていた。僕以外の人は、星さんの会社について知っているみたいだけど・・・・・・・・・・、

「ねえ波風^{はかせ}、その会社ってどんなことやっているの？」

僕は何も知らないから、正直に訊いた。名前の通りなら薬をつくっている会社だって想像がつくんだけど・・・・・・・・・・。

それが意外だったのか、みんなが固まった。そして、

「ええええええ！！！！！！」

絶叫が校長室に響き渡った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・という会社なの。分かった？
全く、新聞を読んでいるのに、なんでわからないの？」

「そんなこと言ったって、知らないものは知らないもん。それに、
薬は買うより自分で調合するから薬局なんていったことないもん。
バイトや頼まれ物を渡しに行く以外は。」

「お前、自分で薬を作るのかよ・・・・・・・・・・。」
一通り、波風が僕にどういう会社なのかを説明してくれた。その時
に漏らした言葉を、啓太がきっちりツツコンでいた。

星製薬会社というのは、創業八十年という老舗にしては若い年数
だけど、売り上げは薬業界では一番なんだって。その理由は、その
会社の薬がよく効くからなんだって。今では世界に進出しているん
だって。

僕は飲んだことはないからわかんないけど、波風や啓太は言わずも
なが、月島さんたちも使っているんだって。今度、その薬の成分で
も解析しようかな？などと思っていると、

「すまない。話が脱線した。私達が君を呼んだ理由だったな。」
と、月影さんが話を戻してくれた。あ、そうだったね。ごめん、す
っかり忘れていたよ。

「私達が風間、君を呼んだのは、君と友達になりたいからだ。」
それを聞いた僕達は、

「は？ハアああああ！！？」

それほど経っていないのに二度目の絶叫（僕は初だよ！！）をする
こととなった。

4 - 8 女性陣の会話

「どうして僕と友達になりたいの？」

皆が落ち着いたので、ひとまずは訊くことにした。なんで僕と友達になりたいのか、と素直に疑問に思ったからね。すると、

「？友達になるのに理由なんて必要なのか？」

と返ってきた。必要はないけどね……………、

「ちよつと警戒心が、さ……………」

「それって差別じゃないかな？」

「そうは言っても、ね？」

「月ちゃんとは仲良くやってるのに差別だ！差別！」

と四葉さんが怒り出した。星さんは相変わらずオドオドしてるし、

月影さんは最初に疑問で返して以降、喋ってないんだよね。波風はかぜや

月島さん、榊さんは彼女達（僕と話している女子の皆さん）を見て

ひそひそ話しているし、啓太にいたっては、昔の事を思い出してい

るかのように物思いにふけていた。校長はというと、僕が呼ばれ

た理由を聴いてから仕事に集中していた。さてと、

「うゝん……………」

「どうかな？」

「……………分かったよ。いいよ。月影さんの言

う通り、友達になるのに理由なんて必要ないからね。」

「やった———！」

と、嬉しそうに飛び跳ねる四葉さん。何て言うか、この反応って子供みたいだな。そう思って他の二人を見ると、

「分かってくれたか。それでは、これからよろしくな、風間。」

「よ、よろ、よろしく、お願いします！！」

と、片方はうなずきながら、もう片方は緊張しているのか、テンパりながらお礼を言ってきた。そんなたいしたことじゃないのになあ、と思っただけなら、

「なんか、こつからまた、大変なことになりそうだなあ。」

啓太がそう漏らしていた。ん？大変なこと？なんだろ？そんな事よ、

「本当の理由は？」

「だから、先程も言った通り、」

「いや、それくらいならわざわざ校長室に僕を呼んだりしないでしょ。月島さんと一緒に帰れば、自然と僕達に会えるはずだから。」

その言葉で月影さんは黙り、他のみんなは納得していた。

数秒の沈黙の後、月影さん達がこう言った。

「なるほど。確かに鋭いな、風間は。」

「本当だよ。僕達が考えて出した力モフラージュを、あっさり見抜くなんて。凄いね、風間君！！」

「すごいですね……私達が一日かけて考えたものをこつもあっさりと見抜くなんて。」

と、口々に賞賛してくれた。波風達が、

「どうして、本当の理由を言っていないってわかったの？」
訊いてきた。

やっぱり説明しないといけないのね。そう思いながら僕は説明した。
「うーん、確証はなかったんだよね。ただなんというか、ちよつとだけ不自然だったんだよ。会話しているとき。」

「え？それって、どういうことですか？」

「四葉さんが、不自然なほどに僕と友達になりたがっていたところだね。あそこまで友達に固執するってことは、別の目的があるんじゃないかと思ったんだよ。これで説明は終わり。何か質問は？」

「なあ、普段の会話でもそのことを意識しているのか？」

「いやあ、多分、こういう『裏』のありそうな話の時に意識するんじゃないかな？普段はそんなこと、意識していないから。」

「でも、友達がいなくてさびしいから固執していた可能性もあるんじゃないのか？」

「そう考えたんだけどね、四葉さんを見ていたらそれはないなと思

つたんだよ。ほら、見た感じ明るい性格でしょ？」

「本当にさびしかったとしたら、どうしたのかな？」

「ははは。別に変わらないと思うよ。僕が言ったのはあくまで推測だからね。人の気持ちまで推し測っていないよ。」

そう。結局のところ、推測というのは、その人がどういう気持ちでこういう行動をしたのか、なんてまでは分からない。せいぜい、『この人は多分、こういう考えをしていたんだろうな。』程度だ。

でも僕は、推測が決して悪いわけではないと思う。なぜなら、それは自分の考えを、自分がそう思う根拠で示すこと、つまり、自分の意見をきちんと言うことと同じだから。

「……………あくまで自分がこう思っているだけで、この考えを押し付けるつもりなんてないからね。また脱線しちゃったね。話を戻そうか。」

「四葉、もういいんじゃないか？お前のあれは、確かに不自然だったぞ。」

「うそっ！……………そうだね。うん！やっぱり正直に頼んだ方がいいよね！」

ん？『正直に頼む』？……………もしかして、僕に頼みごとをするためにこんな方法を選ったのかな？そう思っていると、

「ねえ、風間君。ちよつとお願いがあるんだけど……………」

「……………」

「そう言いながら四葉さんが

「な、何かな？お金以外なら別に構わないけど。」

「本当！？じゃあ早速なんだけど、僕達と付き合ってよ！」

「え？それくらいなら別に……………」

「いいよ、と言おうとした瞬間に、

「だめね。」「だめだな。」「そうですね。」

と三人が同時に言った。……………あれ？なんで

三人とも否定しているの？そのことを啓太に訊こうとしたら、

「宿題でもやろう、つと。」

「ここで宿題をするのは感心できないんだが。」

「いいじゃないですか。俺達、なんか蚊帳の外っぽいですし。」

「私は関係がありそうな話題のような気がするんだが……………」

……………」

「そんなの野暮ですよ、野暮。」

明らかに現実逃避をしていた。できることなら僕も現実逃避したいなあ、そう思いながらも、波風^{はかせ}達の口論を聴いていた。

「どうしてさ!？」

「泰輝はまだ停学処分が終わってからそんなに日が経っていないのに、また前回のような騒動が起きたらどうするのよ!？」

「それは大丈夫だと思いますけど……………」

「というか、なぜ月島はそちら側なんだ？」

「うるさい！私だって付き合いたいのに、そんなことさせるか!」

「それは私怨ではないのか……………？それに、若干意味が変わって
るような気がするのだが……………」

「えっ、あっ、あの、みなさん。そういえば、もうすぐテストなん
でしたよね？」

『あ。』

口論の途中に榊さんが言った一言で、全員が正気に戻った。

4 - 9 テストって面倒以外の何物でもない

「……………あ。僕と啓太と校長先生は別ね。ちなみに、この学校のテストは、中間と期末の二回あって、それぞれの赤点が五十点。ハードル高いよね？どう考えても。」

「うちの学校では、五十点が赤点だからな。それを下回った者は夏休みに補習だ。……………最も、風間君は出席日数が足りないから、すでに補習だがね。」

「やっぱりですか……………。分かってはいましたけどね……………」

校長が、僕に対して死刑宣告ともれることを言った。その言葉を受けて、僕は肩を落とした。中学の時には、補習なんて受けたことなかったんだけどなあ。そう思っていたら、

「冗談だ。」

「それは僕にとって笑えないですよ!!」

校長先生の冗談だった。よかったあ、まだ補習じゃなくて。それもつかの間、さらに校長が、

「しかし、今回のテストで赤点を取るようならば、本当に補習になりかねない状況になるぞ。」

と言いつつた。

「……………え」と、確か赤点が五十点でしょ。

となると僕の中学の成績を考えると……………、

「……………どうしよう。」

僕は冷や汗が止まらなくなった。それを見た啓太が

「どうしたんだ、大輝？」

「い、いや、な、何でもないよ!うん!本当に!」

「いや、どう見ても何かあったような感じがするんだが……………」

僕の焦った状況を見ていた波風^{はかせ}が、ふと思い出したかのように、

「そういえば、大輝の中学の成績って、それほどでもなかったような気がするんだけど。」

「え？そうなんですか？」

「おい、そりゃあ、まじかよ。」

「本当なのか？理江？」

「ええ。確か……そう、国語は百点をいつも超えていたわ。数学は、百点の時もあれば、八十点の時もあったわね。」

と、僕の成績を明かしていく波風。

「ちよつと！！言わないでよ！！そういうこと！！」

「あら、いつもは『テストなんてどうでもいい』って言っているじゃない。それとも何？そんなに聴かれないのかしら？」

「うつ！！……いいよ！だったら僕が言うから！！」

「そう。ならよろしくね」

してやったり、とでも言いたそうな顔をした、波風。ひょつとして僕、はめられた？そう思い波風のほうを見ると、ブイサインをしていた。

「……やられた。まさか仕返しをしてくるとはね。うつかり乗せられちゃったみたいだ。今度から気をつけよう。そう思っていたら、」

「おい大輝。ほかの教科は？」

と、啓太が急かしてきた。みると、ほかの人たちも興味津々のようだ。そんなに僕の成績が知りたいの？僕は、ため息をつきながら自分の成績を語った。

「……英語は六十点くらいかな？僕は百点だと思っただけ。それで、理科が零点、社会が七十点くらいで、保健体育が四十点だったよ。」

「ん？おかしくないか、それ？お前、前に両親の手紙が英語だったって、言ってたよな？それに、子供の頃に薬品の取り扱いを教えてもらった、とも。」

「うん。だからちゃんと書いたよ。それなのに点数がこの有り様なんだよ。どうしてだろうね？」

ちなみに、僕と啓太の会話を聴いていた他の人達（波風と月島さんと榊さん以外）は、「風間君の両親って、放任？」「複雑な家庭環境だったんでしょうか？」「子供に薬品を扱わせるか？普通。」「なるほど。だからこんな子になったのか。」「と言っていた。全部にツツコム気はないからね！と思っていると波風が、

「どうして、って、あんた知らなかったの！？」

と驚いていた。そりゃあ、終わったことに興味なんてなかったからね。納得がいなくても、『テストだからいいか』としか思っていなかったし。そのまま僕は黙ったのに耐えられなかったのか、波風が、

「いい！あんたの解答用紙を先生に見せてもらっただけで、特に英語と理科、何よあれは！？」

「なんで波風^{はかせ}が？」

「あんたが呼んでも来ないからでしょ！？」

「え？そうだったけ？」呼ばれたことあったけ？

「・・・・・・・・・・・・・・・・ハア。いいわ。話を続けましょ。他の教科は問題なかったけどね、英語は筆記体で書かれていて、しかも本場の人が見ないとわからない位に流れるような字で書かれていたの。だから、かろうじて判った所だけを採点していたらその点数になったのよ。それに理科は、高校でも習わないようなものを追記していたから、先生もそれが本当なのかどうか判らなかったのよ。だから結果的に零点になったのよ。」

「へえー、そうだったんだ。道理でテストが返される度に『お前、これから理科のテストを受けるな。頼む。』と泣きそうになりながら言われたのか。」

その言葉で皆が、

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

沈黙した。そして、校長がその沈黙を破った。

「これは、先に聴けてよかったな。では、一人だけ理科と英語のテスト方針を変えるとするか。・・・・・・・・・・それでも保健体育のテストは赤点だろうがな。」

その言葉を聴いた僕は、あ、本当だ。でもこればかりはなあ、と思っていると、

「なあ、なんで泰輝は保健体育のテストがそんなに低いんだ？」

「別に、そんなに興味ないから。」

「え、え、え、それだけかよ。だったら保健で興味があるやつであるのか？」

「薬物とか、たばことか、応急処置とか、スポーツのルールくらいかな？」

「なんちゅうチョイスだよ！！思いっきり化学関係じゃねえか！！」
だって、それくらいしか役に立ちそうなものないんだもん。そこで波風が、

「ねえ、補習受けたくないなら保健体育でもやらないと駄目じゃないの？」

痛いところを突いてきた。

「うつ！・・・・テストまで、あとのくらいだっけ？」

「二週間切ったんじゃないかしら？」

「これから頑張るしかないか・・・・・・・・・・。という訳でごめんね。できないよ。」

と言つて、帰ろうとしたら四葉さんが何を考えついたのか、

「そうなんだ・・・・・・・・・・。あ！！じゃあさ、」

この言葉を聴いた僕はちよつと、いやかなり嫌な予感がした。

まさかとは思うけど・・・・・・・・・・、

「みんなで勉強会でもやろう、っていうんじゃないよね？」

「ええ！？どうして分かったの！？」

やっぱりか。テスト↓勉強会の発想は普通だと思っただけ。それに、このメンバーで勉強会をやったら、ちゃんと勉強できるのか不安なんだけど。

そうとも知らずに四葉さんが、

「いいじゃん！やろうよ」。僕はそんなによくはないけど、スズちゃんも頭いいから、保健体育を教えてもらえるんじゃない？」

と本人の了解もなしに決めていた。それを聞いた星さんは、

「ええ！！ちよ、ちよつと、美紀ちゃん！！？勝手に決めないでよ！？」

「え、御堂ちゃんも来るんだから大丈夫だと思うんだけど。」

「私も巻き添えか。……しかし、別に構わないのではないか？これを機に、みんなと仲良くなれるチャンスだろ？」

「そ、そうですね！」

とあつちの方は決定の様子。で、こつちかというと、

「カリアは何が得意なの？」

「私は歴史だな。そういうお前は？」

「特にないわよ。不得意科目もね。」

「柊は、英語は大丈夫だろ？」

「そうですね、アメリカ英語ではないので……。」

その話題に触れずに話をしていた。なので僕は、

「ねえ、みんな。あつちの方は勉強会をするつもりだけど。僕達と一緒に。」

と言ったら、

「いいんじゃないかしら？」「私もだ。」「いいですよ。」「かまわねえぜ。」

あつさりと決まった。早いなあ、みんな。と、四葉さん達は話し合いが終わったのか僕に向かって、

「そつちはどう？」

と訊いてきた。なので僕は、

「いいって。」

と答えた。このメンバーで本当に勉強になるのかな？そう思いながら。

一方、四葉さんは「本当！？やったあー！！じゃあ、明日からね！」「と言って三人で帰っていった。あれ？どこで勉強するの？と、訊く間もなく三人は、校長室から出て行った。

「さて、とりあえずここから出ようか。」

と言って、僕達は校長室から出た。その時に、「失礼しました。」とちゃんと saying てね。

学校を出る間、僕達はこれからの予定を話し合った。

「啓太はどうするの？」

「俺？うちに帰ってから勉強だな。泰輝は？」

「うーん。保健体育を重点的にやらないと駄目なんだよねえ。あとは、何かやる教科あったけ？」

「知らないわよ。」

「柊はどうするのだ？」

「私はとりあえず、教科書を読んできます。そのあと問題集をやって、分からないところは泰輝さんにでも訊こうと思います。月島さんはどうなさるのですか？」

「私は、明日からやる。一人暮らしだと、わからないところがあったらそこで止まってしまふからな。」

「電話してくれば、教えてあげることができるよ。」

「それは本当か！？それならやれる気がしたぞ！」

と言って、はしゃぐ月島さん。やけに嬉しそうだけど、そんなに自信なかったのかな？それを聴いていた波風は、はかせ

「私も教えてもらおうかしら？電話で。」

と言ってきた。しかも、『電話』の部分だけちよつと大きな声で、それを聴いた月島さんが、

「理江。それは私に対する嫌がらせか！？」

と言ってきた。それに対し、

「別に、そんなじゃないわよ。私も分からないところがあったら

教えてもらおう、と思っただけよ。」

「それを嫌がらせというのではないのか？」

何やら険悪な雰囲気な二人。でも波風さ、

「家が近いんだから、直接訊きに来ればいいのに。」
と言ったら波風が、

「それでもいいけど、私は電話がいいの!!」

と怒り出した。まあ、本人がいいならそれでいいけどさ。その後、僕達は自分の家に帰っていった。僕も赤点とらないように頑張ろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6900x/>

考える人

2011年11月20日21時39分発行